

同人雜誌

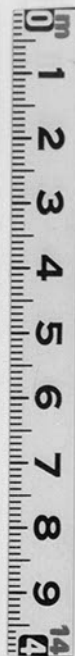
港

の

灯

月刊

二月號



迎春

有限會社 小名濱造船所

代表取締役 藁谷寅之助
 專務取締役 小野虎次郎
 事務取締役 飛田芳藏
 監査役 宮野靜翁
 監査役 馬場上増次郎

福島縣石城郡小名濱町字榮町一番地
 電話(小名濱)一九五番

***** 同人雜誌 *****

燈の港

文藝に娛樂に

郷土の言論機關に

刊 號
 二 月

目次 二月號一躍七百部發行

昭和二十四年
 二月號

郷土雜誌の眞の在り方と 青壯年並びに識者に訴ふ	東 義 將(二)
短 歌	瀧 端 滋 子(二)
雜 詠	近藤正雄(三)
吾 子	相澤正一(三)
御 返 事	川添 惠美子(三)
漫筆 小名濱町議列傳	あづま・よしまさ(六)
「港の燈」の大使命に寄す	宇佐美 武久(八)
夢 去 りぬ	生(三)
短 歌	T 獨 靜 香(三)
初 春	日本水素 針の麥(三)
コ ン ト	東 義 將(七)
隨筆 恐怖の十三分間	東 義 將(七)
隨筆 文章に親しむ迄	柏浦 角治(三)
祭 日「成人の日」の回顧と元服考	東 義 將(四)
隨筆 光を戀ふ	新 妻 渡(三)
長篇小説 吹雪を衝く(二)	東 義 將(四)
表紙 執筆	鈴木三男
特別會員、贊助金謹告	(五)
新會員紹介	(五)
編輯後記	(五)

郷土雜誌の眞の在り方と青壯年並びに識者に訴ふ

本誌主幹 東 義 將

出版物は中央から、書籍の刊行は東京からとは、まるで世人の常識の如くである。蓋し大なる誤りである。かくては地方の人は、自分の意見を、又自己が發表を欲する事柄を、地方新聞の一隅に限られたる字數の下に、掲載される位がせきの山である。又讀む面から云つても、例へば雜誌にする、確かに中央の發刊になるものは、凡てが大家のもの、又は一流作家の筆になるものばかりである。又、時代を追ふ爲にも、それ等の人々の書いたものは讀まなければなるまい。併し、大家のもの、一流作家のもの、特に最近の人々のものなどは、必ずしも全部が全部、興味深しと云つたものばかりでないとの感を抱かれるのは豈、筆者ばかりではあるまいと思ふ。併し、それとは別に郷土の人の作品に目を通される事も亦、興味深い事と考へる。筆者が前から希望した處は、地方々々に、それこそ全國的に自立自營の許す限り、郷土の雜誌の刊行を見て、リクレーションを盛り、傍はら、郷土の言論機關となる雜誌の存在を見度いと思つてゐた。併し筆者自身が、此の小名濱町を主体とした郷土雜誌を發行し様などは、先の日迄、夢にも考へてはゐなかつた。實に感激し、感謝するものである。筆者は郷土雜誌の存立の條件に自立自營と云ふ言葉を前述した。自立自營とは、即ち會員のみの支出に寄るか、又は眞の理解者よりの淨財に寄つて、その雜誌の經營が成り立つて行く事を云ふのである。經營苦しさに地方のボスの走狗となり、あるいは、利に走つて政黨人をその背景に持つた擧に出で、遂に偏するが如き雜誌を作る位なら、むしろ郷土の人の爲にも發行せざるにしくはない。併し、世には雜誌三卷と云ふ言葉がある。雜誌發行の難事ばかりを云つたわけではあるまいが往々刊行された雜誌が、その程度の發行で消滅する事を云ふものであり、又、確かに實相も穿ち得てゐる言葉でも

ある。その意味に於て、此の「港の灯」が、前述の筆者の言葉と對照した場合、此の雜誌三卷を果して乗り切る事が出来るかどうか。現在入會戴いてゐる正會員諸氏、並びに御後援下さる特別會員の諸氏には、隨分心もとない言葉ではあるが、是は赤字ばかりの問題ではない。別の意味から云つても、世に雜誌として、特に同人雜誌と銘打つたもので、一人の人間が書き、又單獨で、何から何迄やり上げる雜誌があるわけのものではない。實に至難であり、無理であるのだ。勿論、はぢめはこんなつもりでは無かつたが、成行きが筆者をして獨りにしてしまつたのである。印刷所の工員諸氏の職場離れての協力的製作意慾は身に充分には感じるが、是は自づから問題が別である。「港の灯」が此の調子で一年續いたしたら、むしろ奇蹟とさへ云へるのだ。奇蹟は敗戦以來信じぬ事にはしてゐるが、併し是ばかりは是非に希望仕度い。石に嚙り付いてもやり遂げ度い。併し世間と云ふものは仲々複雑なものなので是から先の茨の道を覺悟する位の言葉では間に合はないものがある。

筆者は前號に於て「港の灯」の存立の必要から、投稿の僅少と云ふ事を訴へてゐた。處かその投稿は、締切前後にボツ／＼とは戴いたのである。そこで筆者は、その投稿から見た青年層に就いて、郷土の青年又識者にも訴へ度い事がある。實はその投稿たるや、歌の様なものとは別として、否、歌にさへ、實にその文が一体何を書いてゐるのか、サツパリ意味の汲み取れぬものが多いのである。無論全部が全部と云ふのでは無いが、文章等に至つては、殆どが只、徒に美辭麗句の羅列であり、そこに何を云はんとし、何を語らんとするか、幾度繰返して讀んで見てもその意味に徹し難いものが實に多いのだ。勿論是は若い人に多い。併し中にはもう若いとも云へない人の作品もあるのだ。前號に於て筆者は投稿を切に望んだものには違ひ無いが、何も鹿瓜らしい意味の無い整頓漢字横溢の文を、あるいは他の文章の寄せ集めの感ある文を、お願いしたわけでもなんでもない。もし筆者が、美文を望み、あるいは香り高き詩や歌を希ふのなら、既に創刊前に港灣會社、砂押氏や、第二小學校小濱先生の許にでも馳付けてゐる併し自分は、例へば砂押氏の書かゝれる様なものは、「港の灯」に載せて戴いても、會員諸氏の中には、判らない人があるのではあるまいかとの考へ、敢て兩氏の許に參上する態度を採らなかつたのである。尤も小濱先生には十二月末、幸に御入會は戴けてゐる。併し前述の筆者の言葉は、會員諸氏には主幹として、隨分失禮な言葉で

はあるが、どうか下記を讀了して諒として戴き度いのである。打ち明け話をする、本誌發刊前に、御存知のアン印刷物一枚で、御餐同、入會願へた會員の数は、三百八十余名であつた。その中、筆者の懇請に應じて呉れた人々は約二百五十名を占めてゐた。そんなわけで筆者は、誰よりも、本誌會員諸氏を熟知申上げてゐるわけである。筆者が入會を懇請したの中には「あなたが来たんでは入ろう」で、唯好意的に入會して呉れた人もあれば、「何だか判らねえけど、港の灯と云ふんげや、入らなきや義理が悪かろう」で入會して呉れた人もあるのだ。茲で會員諸氏に申上げ度い事は、こうした人達を諸氏は、決して輕んぢては無らないのである。否、むしろ筆者に云はすれば、後者の言葉の如きは、實に是を尊しと見てゐる。勿論海に働く人の言葉である。海に働く事を天職とし、海を愛し郷土を愛する人にして、はぢめて口を突いて出でる、實に崇高なる言葉とも云へるのである。假に「炭礦の灯」と云ふ本が出たとして、その名故に炭礦で働く人が入會したのと同じだとの例を挙げたら、失禮乍ら良くお判になる事であらう。世には、エセ文化人も實に多く、一皮剥けば、こうした人々と五十歩百歩の者も尠なく、むしろ、先入主的にこうした徹底した信念も持つ事も出来無い人も多いのだ。併し理論は兎も角として、この様な人達に假に砂押氏の終焉記の如きを讀ませても、確かに無理なのである。實は筆者も「点景」誌上に、氏の終焉記を見て、幾度か讀み返したが、尙完全にあの詩を自分のものとは成し得なかつたのである。そこであの詩を根底から、自分のものとされるであらう處の「点景」會員諸氏を實に尊しとして、當然氏の作品に對する批評があるとの期待の下に同誌の合評の中を刻明に目をさらしたが、遂にアノ詩の批評を見る事が出来なかつたのは残念である。あるいは當の砂押氏、又其の他の人にして、こうした言葉を吐く筆者を、哀れな者との感を抱かれるかも知れないが、併し筆者は、自からその哀れな者で結構なのである。「港の灯の名前が入ろう」の人達と共に手を携へて行く事を以つて、筆者は眞の文化への前進と確く信じてゐる。世に純文學と稱するものがある。筆者はその定義を知らない。又大衆文學と稱するものとのけじめも辨へ無い。併しある文壇の大家が、確か吉川英治氏と記憶してゐるが「大衆の解せざる文學を以つて、文學とは云い難い」との意味をもつと強い言葉で喝破されてゐる。筆者も深くそれに共鳴するものであり、筆者は夙に、文學に純と銘打つものと、大衆文學と名付けるものとある事を既に背づき難く、

今も疑問に思つてゐる次第である。又前述の如き本誌への投稿の一部の青年が、わけの判らぬ意味もない美文、美句の羅列を以つて、それで事足れりとしてゐるその影響は一体何處から來てゐるのか。即ち純文學に對する模倣である。否模倣、曲筆すらもなす事も出来無い淺薄なる水準を以つて尙且、是を犯す、あるいは又一種のがれでも云へるのかも知れない。まだ「点景誌上」に見た「足音にいなご飛び込む小川かな」の方が、例へ「古池や」になつてしまつても、此の方が、學童丈に可愛らしくて宜しい。前記青年達の投稿の依つて來るその心事は、筆者も充分には解釋はなし得ないが、只その全文を通讀してみても、わけの判らぬ眞似事ではあるが、純文學と云ふものを追つての筆法である丈は充分に背づけるものがある。此處に於ては純文學？も妙な形で、變つた影響を與へるものなりとしみみと考へもした。併し筆者は「港の灯」をしつゝあけて、郷土の純文學專攻？の諸氏に挑むが如き感情を抱くものでは決して無い。只希はくば、諸氏は、何卒その知性深き頭惱を以つて、大衆が讀了、即、呑み込む事の出来る平易な文章で、郷土の人々に、特に青年層の爲に筆を採つて戴き度いと思ふのである。日本水素邊りの文化部にも相當自信ある人も居られるのであるまいか。筆者は又、諸氏の投稿を「港の灯」誌上に望んでゐるわけではない。又、諸氏が香り高き文章を、又奥深き詩や歌を抽象的の辭句にのみ終らず、平易な文句で書かれたにしても、決してそれが、諸氏を傷付ける何ものでも無い筈だと考へてゐる。徒らに「港の灯」を冷笑するばかりが諸氏の能でもあるまいと思ふ。又筆者は改めて青年諸君に申上げ度い事がある。諸君は余りにエロ雑誌を讀み過ぎるのだ。流行歌を唱い過ぎるのだ。自から頭の中を空っぽにしてしまふのだ。諸君がその青春時代を謳歌されるのは良からう。併し、もういゝ加減に諸君はエロ雑誌に見切りを付けては如何か。何も青年全部が、そうであるとは云はないが、殆どの青年が、右の如きであると筆者は是を斷言する事が出来る。又、確かに最近ではエロ本が若干は退化した如き傾向はあるが、筆者に云はすれば、唯、女の裸体を扱つた如き毒々しい色彩の微發的の表紙などを具へたものなぞが一寸尠くなつた丈で、その内容に至つては依然として改まつてゐるとは考へられない。筆者も確かにエロ本には目を通した。但し買ふ要は持たない。如何となれば試みに青年ばかりか成年層の人達にも「何でも良いから本を貸して呉れ」と申込めば、必らず「ロクな本は無いけれど」で貸して呉れる雑誌の中、假にそれを五冊とす

れば、中四冊がエロ雑誌でありグロ物であつた。正に云はれる通りロクな本では無い。(グロ物にしろ、その狙ひはやはり汚い變態的のエロにあるのだ。以下筆者の云ふエロ雑誌とはグロ物も含めたものと承知願ひ度い。)併し青年層が、エロ雑誌に耽溺してゐる事実は充分に物語つてゐる。エロ雑誌など云ふものは、諸君自身が知る様に、その内容は大同小異のものである。但しその大同小異の内容のエロ雑誌の二冊々々が、諸君を毒してゐる事は實に大きなもので、又それが絶対の事實なのである。エロ物も小説の様に書いてあるものが多いが、元來小説と云ふものは、読んで作者の云はんとする意圖を知ると共に、その文から來たる情景が、直ちに映画の如く走馬燈の如く、否それよりも尙早く、讀者の頭腦に寫る事を以つて、その小説の成功の大半と考へる。世には情景を髣髴すると云ふ言葉があるが、小説通讀の場合も亦それであるのだ。しかるにエロ小説には少しもそれが無いのだ。情景髣髴などは飛んでもない話なのである。しからば讀者はどうして興味をつなぐのか。つまり自分の頭腦で、無理に情景を描くのである。印刷である卑わいの字句から、自から妄想をたくましくして満足する丈なのである。かくて、病、膏もうに至つた輩は、自づから自慰となり、春賣婦への接近となり、あるいは性犯罪への前進となるのだ。實にその害毒や恐るべしと云ふべきであり、是が、民主主義を誤つて解釋した淺博なる國民のみが犯す悲しむべき産物だつたのだ。自分は以上の言葉を以つて決して行過ぎとは考へてゐない。例へ、前述の如き害毒の何れにも陥ち入らない人にして、エロ雑誌を讀んでそこに諸君は一体何が残るか、未だ日本の歴史には、エロ雑誌の氾濫した時代を見ないから、その方面から見た、今日の社會の結果が、將來どんな統計を生むのかは計られないが、強いて云へば、徳川中期、元祿時代、もしくはそれ以降の時代を以つて、今日の狀態と比較する事が出来るかも知れない。併し逆のぼる、それ等の時代にしても、今日程の醜惡なものであつたとは考へられない。又、それはいづれにしても、徳川中期以降の廢額振りの及ぼした罪惡に就いては、史家ならずとも、大衆の既に熟知する處であらう。只、現在の狀態が、終戦に依つて急激に來た事実に、過去のそれ等の時代より、却つてはるかに怖ろしい事であるのだ。青年男女ばかりか、年輩者の中にさへ是に興味を持つ人もあり、況して青年達は曾て覗かなかつた世界を覗こうとする、そうした意慾が、その慾望が、エロ雑誌發行に依つて利益を擧げる輩の乗じる處となるのである。

しからば、是は只政令に依つて禁じれば良いか。否、それは大きな誤りであるのだ。禁じられたものは却つて讀みたがる、知りたがるのが人情である。石坂洋次郎氏の「石中先生行狀記」が政府の騒ぎに依つて、却つて有名になり、又良く賣れたのも、その良き一ツの證左なのだ。凡ては只青年男女の自覺に便るより他に方法が無いのだ。前にも云つた様に、全部の青年がこうであるとは申上げないが、殆んどの青年が、しかも知識層の人と云へ共、その害を受けてゐるのが現實なのだ。青年諸君、諸君は、流行歌も良し、映画も良かる。又映画雑誌を愛される事も宜しかる。併し過去とは云はない。遂數年前の諸君の兄達は、否、諸君自身も、國家に徴兵と云ふ規準があつて凡そ健康体を維持する人なら、平時ですら二ヶ年の軟禁生活と、教育と稱して苛酷なる勞働と取扱を受けて來た事は、敢て筆者が茲に申上げる迄もない事である。併し幸に現在の諸君には既にそれが無いのだ。併し、諸君は、そうした過去に、そんな時期のあつた事も少しは想起されて、せめて、現在の日々のほんの一部の時間を割いて、諸君の反省と修養の時間とする氣持ちになつては戴けまいか。否、修養とは云はない。良書を讀む丈で結構である。又良書とも申上げない。せめて、明治から大正へ掛けての文壇の大家の書かれたものを讀みあさられる丈でも、諸君の人生を益され、大なる收穫のある事を、筆者は是を確信するものである。良いものを讀まれ、ば自然書き度くなるのが人情である。文筆を愛する事が如何に若い諸君の人生の面目を一新するかは、どうか切に味はつて戴き度い事である。「大いなる理想は持たぬ我なれど折ふし辭書を引きて讀書す」とは、本誌同人近藤正雄氏の前號に於ける投稿の歌ではあるが、要するに筆者は、青年全部がせめて此の心掛けであり度いと希ふ。只筆者の如き者が以上の如き言を吐いたとて、諸君はむしろ苦笑を覺えるかも知れない。確かに筆者も目下は人生をやり損なつた人間の中である。然りとて、こうした言葉も只凡て己れの誤つた轍を、若い諸君に履ませたく無い念願に他ならない。筆者も落伍組として土中に睡るか、あるいは運命が雲を巻き起こさして呉れるかは自から知る處でないが、唯今日尙、分に應じた勉強文は續けてゐる。是から先も、一生それを續け様共考へてゐる。又一面、若干余事には涉るが、もし筆者が自己の趣味とする小説を、過去一二年に筆を曲げて、是をエロ小説に走らせてゐたら、あるいは筆者も東京の雑誌にその名を連ねてゐたかも知れなかつたのである。此の事は當小名濱に於ても、知る人ぞ知る絶

對の事實なのである。併し筆者の如き名も無い人間ですら、エロ雑誌の青年男女に及ぼす悪影響を考へて、敢てそれをしなかつたのである。以つて諸君も上記の筆者の潜越の言葉も、些かは是を諒として戴き度いと思ふ。併し、筆者も、若い諸君が、その職場を通じて日本再建に努力されてゐる事も良く知るのである。又現在の世の中自體が悪い事も熟知してゐる。確かに今の世の中は悪過ぎる。中央政界に於ける、び瀾廢積振りに至つては、筆者にも實に何が何んだか判らなくなるの感を抱かせ、只々、失望するばかりである。只筆者に判る事は、次代を背負つて立つのは若い諸君であると云ふ事丈なのだ。青年諸君！明治から大正へかけての國家の大物は、むしろ郷土の青年から輩出したものである。勿論、現在の大物とはその行き方がまるで違ふ。確かに藩閥的傾向もあつたが、青年自からの努力のあつた事も事實である。郷土の青年諸君！どうか時代の改造は諸君の手に依つて成し遂げて戴き度いとお願ひする。又、改めて知識層、成年層の諸氏にも訴へ度い。どうか諸氏は、現代の青年の在り方を忘れなさい。諸氏が青年を忘れる事は、即ち青年を見殺しにする事になるのだ。戒心すべき事である筈だ。無名の筆者にすら、上記の如き感情を抱くものである。何卒、心ある人は、切に此の際立上つて戴き度い。青少年の不良化を防止するの目的とする機關などもある様であるが、不良化さんとする事を防止する丈では駄目なのである。もう一歩前進して、一般青少年に對しても、眞の善導を目指して呉れなければ絶対に駄目だ。此の儘では、日本は表面丈の團體維持は兎も角として、その内容に於ては必ず自滅の一途を辿るばかりである。現在の青年達を諸氏がデツと直視された丈でも、必らず良くお判りになる問題である筈だ。曾ての戦争に、凡ゆる層の人達が、自己の金儲けにのみ狂奔した事が、敗戦へ拍車を掛けた事實を省みれば良く判る事ではないか。又思想的にも實に戒心すべき時代でもある。言論の自由と共に、凡ゆる思想が混沌として活躍を開始してゐるが、筆者の私見を云へば、例へば敗戦に依り今日我國が思想に又經濟に、未曾有の混亂時代を現出してゐるとは云へ、未だ／＼我が國情に、我國民に、相容れ難き思想もある様である。ある大工場の掲示板の如きは、そこに張られたポスターや告示物を一瞥した丈では、その工場が恰かも一ツの思想に依つて塗り潰されてゐるかの如き感を受ける所もある。勿論事實はそうでは無いのだ。又ぞうあるべき筈も無いのだ。只、彼等の活躍が仲々派手である事に止まる丈なのだ。勿論思想の採り入れ、又そ

の取捨選擇に就いては、個人々々の自由である事は言を俟たぬが、果してその採擇の基礎を現在の青年が充分に把握してゐるであらうか。徒らに附和雷同に流れる處がありとはしないか、筆者は只それを怖れるばかりである。又確かに現在の爲政者も悪いのだ。曩に國會は解散し、總選舉も間近かに控へたが、筆者は今では、どの政黨も信じること出来なくなつてゐる。どの政黨も信じられぬ事は、どの候補者にも信を置けない事になるのだ。勿論、こんな態度ではいけないとは判つてゐるが、此の失望を如何にせんである。あゝ、眞の救國の士は出ないものであらうか。此の儘では國が亡びてしまふ。諸氏が自分の祖國が自滅するのを此の儘看過するとは考へられない。どうか、祖國を愛し、郷土を愛し、しかして青年を愛する人は、せめてその意味でも「港の灯」への投稿を以つて、充分なる意見を發表して戴き度いと深く希ふものである。筆者は此の言葉を決して、我田引水などは考へてゐない。せめて郷土に、眞の良き指導者が現れて戴き度いと希ふ以外に他ならないのだ。本誌がリクレーションを半とするも自から町民の聲、郷土の言論機關たらんと欲する事は、度々前に聲明した通りである。但し茲にお断はり申上げ度い事は、郷土雜誌の眞の在り方としては、如何に切實の町民の聲も、又熱意ある郷土の叫びも、又其の他の單なる言論と云へ共、その掲載の詮衡に對しては、當面の責任者である筆者は、凡てに冷靜且嚴正なる態度を持して、その激しきに過ぎるは採らず、偏するは是を捨てる事は切に御諒承願ひ度い。元より今日の刊行物で、その誌上に掲載されたものに對しても、その記事の取捨選擇も亦讀者自らがなすべき事であつて、筆者の立場が、かく迄氣を配り、心勞をなすべきで無い事も辨へてはゐるのだ。併し例を擧げてお話すると、こう云ふ事になるのである。例へば今日天皇制の問題にしろ、筆者は是を東京裁判等を大なるモメントとして、天皇の立場と云ふものも、ある意味で確立されたものとの考へを持つてゐる。然りとて、此の場合、今更事新らしく天皇制維持のみに拘はつて云々とした記事も如何かと思ふが、又それとは逆に、天皇制に反對する思想を持つ共産黨の人々が、本誌へ投稿されたとして、いはゆる天皇を尊とし、大切なりと呼ぶ人々との反對の意見、即ち、天皇は意味無き存在なりとか、ロボットの立場なりとかの文を寄せられたとして、是を本誌に掲載されたとしたら、本誌會員諸氏が果して如何なる感情を持たれるか。それを只、その人達の考へ方なりとして、其の儘讀み下してしまはれるであらうか。筆者は

また、郷土の人々が、否現在の日本人の殆どの人々が、こうした叫びをむしろ不愉快のものとして、こうした文を迎えない事をよく知るものである。その場合現在の立場である筆者が、その記事を無關心に掲載する事が出来るかどうか、切にそうした点をお考へ願ひ度いのである。中には好んで、面白い記事のみを讀みあさる青年達の存在する事も知つてはゐるが、然しそれは大半が前述のエロ雑誌に於ける場合と同じく、曾て覗かれなかつた世界を覗こうとの意欲と、是も前述の附和雷同組の多い事も争はれない事實である。例を挙げれば實に以上の如きであるが、是は決して筆者が大衆への迎合では無いのだ。便乗でも無いのである。自から大衆の心を心とし、大衆の思想を尊重する事が現在の筆者の責任であり、本誌に對する筆者の務めでもあるのだ。又筆者がかく云ふ上に於て、共產主義の人々に本誌に入會を戴けぬかもしれぬし、尙一步進めて、筆者なり又當「港の灯」なりが、その排撃を受ける事になるとしても、それは互のイデオロギーの相違又止むを得ない事でもある。否むしろ、一ツの雑誌を發行する上に於て、その雑誌の性格なりイデオロギーなりを明白にする事も、會員並びに大衆にとつても亦必要の事であるかも知れない。又それが筆者の責任であるかも知れないのだ。茲に於て筆者も「港の灯」の發刊第二號に於て、その旗色を鮮明にし、本誌が共產黨と相容れざるの行き方なりと、高らかに叫ぶ光榮を有せんと思ふものである。筆者、即ち當「港の灯」主幹東義將の解釋とする處は、日本を救ふものは共產黨なりとは絶對に考へない日本を救ふものは、日本人の一人々々である。一人々々の日本人の誠實並びに自己の責任の遂行と努力以外に何ももないとの確信を持つものである。即ち資本家は資本家で労働者は労働者にして自己の職務の完遂を以つて自己の事業の責任完遂を以つて國家再建に努力されよ。労働者は労働者で自己の職務の完遂を以つて資本家への誠實と知り、國家再建の努力と自覺されたい。是以外に現在の日本の現状打開に道ありとは筆者には考へられない。戰勝國と云へ共バンは不足してゐるのである。況んや日本は敗戰國であるのだ。尙一居の困苦窮乏に堪へる事が現代日本國民の責務である筈だ。只筆者の念願とする處は「乏しきを憂へず、その等しからざるを憂ふ」の行き方でありと思ふ。以上縷々述べ來つたが、上記を以つて青壯年並びに識者に訴ふる言葉とし、尙郷土雜誌眞の在り方としては是を要約すれば、凡てに堂々中庸を行く事が筆者の念願である。正しきにつき「百萬人と云へ共我行かん」の態度を持つこそ、郷土雜誌の在り方であり、且それが眞の使命なりと確信するものである。豈、又雑誌、新聞のみの問題とは考へられない。個人の場合も亦同じ事であらうと思ふ。己れの榮達、あるいは私利私慾に走つて、節を曲げ、自己を賣るなどは人間として心すべき事である筈だ。會員諸氏も宜しく筆者の意のある處を諒とされ度い。

昭和二十四年元旦 霧深く、浪音高き夜記

(完)

短歌

瀧端 滋子

現實のともしき生活在り耐へて厨邊かくてをみな老け行く
慰さまぬ心抱きてさうろうとたゞよふ思ひに山路下りぬ
小夜床に臥る身ぬちを音あてゝ崩るゝかうめき思はずも出づ
抱かれぬ夢にてありし眞夜醒めてやさしみ思へど惜しきたまゆら
憂悶のやりどなければ鋭聲して子を叱りしが悔ひて涙す
あかりどに干柿ゆるゝ影は見て脈絡もなく人の戀はるゝ
紅葉なす色暮れかゝる歸り路のつかれにしみて炊ぐにほいす
寂寞と思ひ亂るゝ庭隅にかまきりのむくろ白々と冷ゆ
たのめなき陽陰冷たしかまきりがむくろの腹部白く眸にしむ
冬夜さり思い屈し居り白秋の香ひの狩獵者閉ちて其の儘

豆白菊

相澤 正一

日もさゝぬ裏の空地に
試みに植えた豆菊
日が立つにつれて
生活力の強い雑草の中に
其の姿はかくされてしまつた
夏が過ぎ秋が來た
意久地無い雑草は枯れて
忘れられてゐる豆菊
細く弱々しく生きて居たのだ
たつた一輪白い花と咲いて
そつとひかえめに咲いた豆菊
その小さい花が大輪より
むしろ純情で愛らしく
まるであの娘の様に清く美しく
ほのかな温みさへもおぼへさせる

雜 詠

近 藤 正 雄

胸を病むと言ふ隣家の娘の力なく咳入る霜深き朝
 生きんとて後幾年のわが父の生命に巢喰ふ病を憎む
 家に病む父に喰はせんと貰いしリンゴ一ツ握りしめて歸る
 病む父の枕邊近く冬の蠅ヨタヨタ歩むをじつと見つむる
 木枯しもほど／＼に吹け蟻ぬちに悲しからずや人の住むてふ
 ともしなく夜がなひるがな焚火して蟻ぬちに住む女二人
 何の感情もないかの様に手づかみで骨あつむ火葬場のひと
 諸を喰ひ乍らリンゴをみがく若き露店商のかなしき微笑
 此の年の最後の入日とめんかにひたすら寒が^稿鳴きて飛び行く

俳句七題

近 藤 正 雄

一人戦死して遺骨は二つせん術もなし
 年の暮座頭の笛につきあたり
 笛の主ふりかへる人もなし年のくれ
 新春の羽音つく町を嫁ぐひと
 ともし^中れ美き女の大き影一つ
 日本髪つまとり上げてあめのみち
 ブリ山のともしび一つ星とあり

御 返 事

川 添 惠 美 子

新年お芽出たう御座います。
 先生始め御家内の皆様、御壯健の事と存じます。元旦の正午
 頃、珍しい方からのお便りと嬉しく拜見致しました。
 早速御返事と思ひ乍ら、今日迄局がお休みなので御返事が
 遅くなりましたが大變失禮致しました。
 七月でしたかしら、お揃いでおる出になつてから、チーと御無
 沙汰して居りましたので、突然で驚き且喜こばしう存じまし
 た。「港の灯」早速拜見致しました。立派な雑誌それに私の
 想像通り殆ど先生の作品ばかりで、何かしらの申した喜こび
 と、唯それ丈でない何か誇らしい様な感じさへ致しまし
 た。
 「吹雪を衝く」本當に懐しい思い出で御座います。みんな過
 ぎ去つた夢の様で、唯その中に、先生だけが生きてゐらつし
 やる様な氣さへ致します。
 先生が、私達姉妹に二人並べて仲良く書いて下さつた宛名人

も今は一人でじーと眺めて居ります。
 先生がつけて下さつた愛稱、太陽ちゃんは、もう此の世の人
 ではなくなりました。昨年十月十六日静岡縣の函南病院で
 ×××の爲二十二才を最後に總てのものに別れを告げてゆき
 ました。
 先生も御存知の私の境遇に、余りにも苛酷な運命のいたづら
 私の周囲は只暗黒に閉されました。想へば、本立寺時代が妹
 の嫌しい全盛時代であつたかも知れません。
 私共の勤め先の雑誌××に私共の拙い作品を先生にお目通
 し戴き御訂正願つたり、又私達のグループで先生のお作を拜
 見したり、又「吹雪を衝く」をみんなで夜の更ける迄聞かせ
 て戴いたりした中の一人の妹で御座いましたのに。今「吹雪
 を衝く」を聞いて、是を膝の上に致しまして、この小説を再
 び読んで居りますと、あの時の先生のお聲から、妹の姿があ
 り／＼と嘘の中によみ返つて参ります。只還らぬ夢を胸に深

い感傷をどうする術も知らない私は、やはり妹に對して充分盡してやれなかつた良心の苛責で御座いますか。送つて戴いた本を佛前に供へて語つてやりました。

何時迄も表情の變らない寫眞が、額のガラス越しに冷め度くお正月の晴着を着てはゐるもの、何故か又それ故に一抹の淋しさがこみ上げて、帯封の上の二人の名前が涙で霞んで見えなくなりました。

何時迄未練を残してゐても、氣を取り直してみましても、さて、こゝ迄が先生へのお禮と、今の淋しい私の氣持ちをお傳へした迄で御座いますが、次に私は突然の事を先生に申し上げさせて戴きます。それは、先生が既に美佐枝の死を御存知であつたと云ふ事で御座います。いえ決して、誰方からか先生がお耳にされたと申し上げるのでは御座いません。それは私が先生のお作の「ポーターの怪異」を拜見してからの私の只感じなので御座います。アノ小説の中の牙子、アレは美佐枝では無いでせうか。成程、境遇、立場、年齢なぞ小説中の牙子と美佐枝とは凡てには異つて居りましたが、アノ優しい義兄の信吉をもし作者に置き替へたとしましたら、アレ程可愛がつて頂いた美佐枝が牙子でなければならぬので御座います。先生、是は私の單なる憶測で御座いますか。それにトタン板の壁に張られた進駐軍の着色の寫眞——先生は私の宅へつた一度おゐるになつた丈でしたが、きつとアレを御覽になつて、御記憶にあつたのに異い御座いません。ア

御事情があまりなのだろうとも話をして置きました。

きつと先生も、アノ本をせめて大陽ちやんの丈夫の中に見せたかつたとお考へになつて下さると思ひます。——私も同じ氣持ちなので御座います。おそらく誰方よりもアノ本を、イエ、活字になつた「吹雪を衝く」を喜んだのは妹では御座いますまいか。アレ程春日將三の好きな妹、アノ小説で春日將三に別れる事の淋しさに、先生にお願いして「飛彈の秋風」を作つて頂いた妹、その「飛彈の秋風」も作の半迄きり知らなかつた妹、先生はきつとアノ日のお氣持ちでは「飛彈の秋風」を妹の病院迄持つて行つて、妹に聞かせて下さる位の感情でいらつしやつた事は、私にも良く判るので御座います。先生が妹へお手紙も無く、病院へもお出願へなかつた事は、きつと何か御事情があまりになつた事と思ひます。只、私には先生が美佐枝の爲に泣いて下さる事は良く判るので御座います。それも是も、今頃は何處かの空にある妹にはきつと何もかも判つてゐる事で御座います。人一倍オセンチで涙もろく、一寸した事にも涙ぐむ妹が、何故にこんなに早く逝つて了つて、女として割合氣の強い涙なぞ余程の時でなければ見せない私を、何故にかく迄泣かせるので御座います。とう／＼一人ぼつちになりました。妹もきつと私の爲に泣いてゐて呉れる事で御座います。自分の事はばかり申上げて失禮致しました。今日は取敢へず、入會金と會費をお返事に添へて。新年草々文面を不吉に埋め大變失禮致しました。向寒の折御身御大切に。 さようなら 惠美子

繪も、あそこ丈が焼トタンを利用して御座いますので、私と妹とで張つたもので御座いました。

先生が小説の中の牙子を描く時に、きつと妹の面影が先生のみ胸におありになつたものに相違無いと考へて居ります。しかも小説末の先生から私への朱書「十月半の一夜作り。事實我家に蚊帳を使ふも讀者の不自然さを思つて九月末の事柄とす。夜半一時、蚊帳の中に目覺めて、突然の時計のゼンマイの巻き戻る音に驚きたるをヒントに、明方迄に書き上げたもの」と、御座いますが、その自然の暗合に私は驚いてしましました。前にも申上げました通り、妹の死去は十月十六日の事で御座いました。勝手言葉では御座いますが、先生のお作の中に妹があるとは、あんなに可愛がつて頂いた妹ですもの、私は妹が先生の許にお別れに上つたものとしか考へられませんか。それに思へば先生が一年半余りで、突然に實に突然お出で下すつたアノ日が、丁度妹が函南病院に出發する前日で御座いました。もしあの日に先生のお出でが無かつたとしたら、又おいで下すつたにしても、それが一日なり二日なりの後と致しましたなら、妹はよく病院で「お姉ちやん、先生お手紙來れるつて云つたのに嘘付きね」などと申して居りました。きつと先生は今、妹へのお手紙の約束を後悔なさつていらつしやる事と存じます。併し、私は妹に「御親類へも何處へも來ないんですつて、明一ちやんに聞いてもちつとも手紙が來ないと云つてゐたわ」と、話して何か先生の方に

迎春

磐城貨物

小名濱第一營業所

小名濱町仲町境一
電話(小名濱)一九四番

皆様の小口定期輸送は——便利で
早くて——安い——當所を御利用下さい。

- 平
- 綴
- 湯本
- 小名濱

迎春

坂本肝油工場

坂本義友

福島縣小名濱町字長枕四八
電話(小名濱)二〇六番

油糧公團指定集買機關

漫筆 小名濱町議列傳 (三)

あづま よしよき

歴史に名高き飯塚進四郎史

歴史とは過去の事、故に諸氏も、今更此の人が町議であるとか無いとかに筆者に苦情を云はない事。兎に角、今だに、デノ問題を此の人が自からくすぶらしてゐるのを見たら、同氏の町政に對する執着か？將又熱心か？いづれにしても町民も大いに買ふべきものがあると思ふ。併し此の人は性善にして純なる人だと云ふ。只此の人は、人の言葉に動かされ勝たと見る人もある。

此の人を動かす人、もしさる人がありとすれば、それは筆者が今更云はづとも諸氏は、小野々々長ぢされてゐる事と考へる。兎に角こんな有名な人を書かなかつたら、銀が夜中に泣いてゐる——オット是は映画王將——ベンが夜中に泣いてゐる。左記は史實に基づく飯塚城主奮闘哀史。

どいん、ヂヤン、ヤア、ヤア、ヤア、ヤア

「我君様、無念に御座ります。も早落城も間も無き様子、早お覺悟あつてしかるべし」

「エーヤ、たはけた事を申すでない。落城などは縁起でも

もう産み月だと思ふんで御座いますか——」

「そうです。私が診察致しました處では、十一月と二週間になつてゐます。ですから、來月は出産は先づ確定です。

エ？ あんまり大きいから双子か三ツ兒ではないかと云ふんですか、それは大丈夫です。聽診しました處、おへソの下には胎動を一ツより感じません。上の方のは、確か貴女の心臓の響きらしふ御座います。ですから、その点は決して御心配なく、確かにお子さんは一匹で、アラ失禮、一人に間違ひありません。エ？人間は九ヶ月と十日で生れるのではないかと云ふんですが、それは無理の無い貴女の質問です。併し、それがそも、矛盾なのです。そこに大きな政治の缺陷があるのです。つまり、政治が腐つてゐるんです。ですから、双子か三ツ子かと誤解を招く様な原因を作ります。早い話が、町政から建直さねば、女は永久にお産と云ふ苦痛から抜ける事が出来ません。政治が悪いから、貧困者が双子を産む様な事に落ち入るのです。ですから私は、その缺陷を是正する爲にも、今度の町會には必ず出馬致します。私が當選すれば、貴女は必ず安産します。私は石に嚙りついて、例へてツツから一番にしろ、二番にしろ、必ず當選する決心です」

カメ女史はその口約を美事に果して、ケツから一番か二番の争を完全に實行して當選した。併しかくも雄辯の女史も、町會では、婦人特有の謙讓の美德を大いに發起して、いつも慎ましく静かにしてゐる。やむを得ない時の他は動かない。

ない。いや、それがしが脱め返してくれんづ……ヤア、遠からん者は炭礦の山にても見よ。近くば寄つて波の音にも聞け。我こそは飯塚進四郎定西の釜足なり。それがし一人になるとも何條、此の城明け渡さんや——さは、さり乍ら余りに振はぬ身方の旗色、こぞの日に縣會選舉の一戦に、湯本の城の身方の裏切、思ひの他に票も尠く思はぬ不覺を取つてより、頼むは小名濱城會只一ツ、人氣の程を盛り返さんとアレヤコレヤを持ち出せど、只、アラ拾いと思はれて、悪人バラのザンに依り、飯塚問題など銘打たれ、腹無き男の評さを無視して、我にツメ腹切らせん、こんたん、かくなる上はやぶれかぶれ、民主の幕府に評へ出で、司直の裁きを仰ぐが無理か、もし亦我に不利となり、我原田甲斐となる時は例へ此の儘死する共、何條犬死なすべきや。七度小名濱城會に生れ變り、やがては縣議の肩書に、大手を振つてのし歩き、やはか恨み晴さでをくべきか——」

「我君様、小野城よりの援軍は未だ到着致しませぬも、浪人ばらがほんのすこし、追つ取り刀で馳け付けて御座りまする」

次は近藤カメ女史。萬緑叢中褐色一点と云ふ處。(どうも紅一点とは一寸云い憎い。御免なさい、カメ小母様)

先づ同女史、町會出馬以前の美談から。

「あの——お産婆さん。アラ、御免なさい。ねえ先生、妾、

例へば「賛成の方の起立を求めます」との議長の声で、隣りの議員が立ち上つた。「近藤さん如何ですか、此の問題賛成願へませんか？」

「さあ——そうですね。御近所が賛成なさるんでしたら——家でも折角診察室を増設したんですし——妾も賛成致しませうかしら、でも家では、晩のおかづは買つてしまいましたからホンの少しだけ——」

町會の議題も「人行流産、是か？非か？」「墮胎は許さるべきか？」等の問題にでも到達する事になれば、それこそさぞ同女史の獨壇上であらう。但し御職業柄、金貨と同意義で専ら産めよ殖やせよに御賛成の事だらうとは思ふ。兎に角同女史の出馬によつて、「たとへ、さらしの一反でも——」と期待した御婦人達、又、是からお腹を大きくしようと思つた中の女性達、同女史にそれを求める事は當を得ない。如何となれば、女史は、配給物を取りに町會に出かけるわけではなく町を善くする爲に、町の政治をとる爲に、出馬されてゐるのだから——

放に、諸氏は、同女史に後者の事の大いに御期待を願ひ度い。——併し、むしろ同女史は、町議としてより、その職の良き先生として、熱心と親切は、大分、大衆から買はれてゐる模様である。

「港の灯」の大使命に寄す

宇佐美 武久

文化向上の強く叫ばれている現今、吾等が愛する小名濱町に、突如同志に依つて、同人雑誌「港の灯」の創立を見た。東先生を主幹に仰いで、この犠牲的且つ献身的な文化の水準向上に寄與される熱意は、全く萬人等しく尊敬に値いするものと共に、私をして感慨無量ならしめた。

淺學非才なる私をして、文化を論ずる前に、文化の課題たる第一段階に頭を突込んで、陰陽表裏、縦横の何たるかを把握せんとする懸命のあがきは私一人ではあるまい。即ち吾々同志は勿論、小名濱町民及郷土の人々の念願するところであらう。

あゝ「港の灯」！
小なる舟、大なる船と云へども、この「港の灯」の果す使命は、航路船路に喜び、と共に安心と愛郷の念の凡てを與へ、まさに命の綱であり、偉大なる存在である。

且又、暴風雨にさいなまれてSOSに救助を乞いつゝある現場に、風雨の合間に、暗夜を漏れて赤い港の灯の点じるのを見たならば、實に神に等しい喜びであり、活動力の源泉とならう。我等が「港の灯」、も文化の面に於ては是と同じ

事である。文化日本として立つには、余りに多事多難なる日本、それに先馳けして点じたる我等の「港の灯」あゝ燈臺にも優る愛の灯よ。

力無き吾々がもし文化の第一段階を把握し得たならば、それに依つても郷土の、否、日本が、世界の文化國家として立上る上に意義量、且大であらう。又平和の國日本の使命もいやが上にも發揚されて、全世界が平和に文化的に行く事を信するものである。

頼むらくは、造詣の深い東先生よ。御賢筆を揮つて刊を追ふ毎に、我々青年の進路を御指導あられん事を希ふものである。創刊號に示された諸氏の立派な文作を見て、郷土の文化向上は、吾等の「港の灯」の力で盛り立てる勇氣と熱意とを持ち得て、我等の手で文化日本樹立のため献身したいと考へた。

私も考へもない平々、凡々たる人間である。然し、この拙い一文章を以つて、前途光輝ある小名濱町及我等の郷土の爲に投稿させて頂いたわけである。

最後に、同志諸君と共に主幹のもとに集り、退き文化の向上に、互に奮闘しやうと叫ぶものであります。

(完)
(筆者勤務先、小名濱郵便局)

迎春

貸席 末 廣

柴山仙助

宴會、商談に 是非御利用下さい

小名濱町上町二
電話(小名濱)三四八番

迎春

貸席 大 南羽一春

此の度改築致しましてお待申上げて居ります
宴會、商談に御利用下さい

小名濱町沖見町六
電話(小名濱)三七番

迎春

外食券指定食堂

ミナト食堂
飯塚勝

宴會商談に貸席御利用下さい

小名濱町橋本九
電話(小名濱)四三〇番

迎春

貸席 ウララ

大森信隆

宴會、商談等に何卒御利用下さい

小名濱町上町一九番地

迎春

一月二十五日

各種時計・眼鏡
貴金屬・万年筆
喫煙具ライター
販賣並ニ修繕

菅野時計店

菅野文榮

自信有ル優秀ノ技術ヲ以ツテ迅速丁寧且ツ親切ヲ、モットトシテ御奉仕申上ゲマス
尙古港ヨリ左記ニ移轉仕リ開店致シマシタ
レバ倍舊ノ御愛顧ヲオ願ヒ申上ゲマス

小名濱町橋本二番地

土木建築
測量設計
製圖一般

有限 常磐土建工業社

代表取締役 草野道人
取締役 鈴木志誠
全 大平貞
全 赤津安三
全 布野施宗
全 草野邦平
監査役 松本政次郎
相談役 水野政次郎

本社 小名濱町本町五〇
電話(小名濱)六二番
長倉 工事事務所
磐崎村上湯長谷長倉

純	愛	繪	卷	T	生
夢	去	り	ぬ		

(一) 泉の驛での出来事は
晴れた日曜寒むからず
映画見物、平市へ
下るお客も賑はげく
ホーム埋つむる人中に
紺屋高尾にあらねども
一際目立つ良い女
(二) あゝ、あれは確かに我女の
S氏訪ねしその宵に
道で出會いしあの娘！
みめ良き姿に氣を引かれ
S氏の宅は知りつれど
わざと道をば問ひ寄せし
あの夜の君に相違なし

(三) その後、道にも一、二回
出會いて會釋かはせしが
さて、それからと云ふものは
幼の影を慕いて雨に日に
惱みつゞけて三日程
他の女性にかけかけて
其の後は遂に忘れたり
(四) 今日、此の時に會はんとは
深き縁しのあるならん
先づ、その廻りをば見渡すに
野郎ばかりか女性迄
連れ立つ人の影もなし
テへ、かにぢけねえ、此の佳き日
神佛の加護、我にあり

(五) 今日の、此の折失は
死んだ親父に濟まぬなり
不具哉天の父の仇
それにも勝る胸の波
男々しく心定めつ、
服のチリをば瓜拂い
曲らぬネクタイ直しけり
(六) のそり／＼と近寄りて
氣付きし如く聲かけぬ
「是は、いつかのお嬢さん
今日はどちらへ行かれますか？」
彼女、けげんに我を見て
訝かる様子浮べつ、
手下げ袋を持ち替へぬ
(七) さは、さり乍ら見よやかし
私の自信に狂いなし
前に立ちたる、それがしの
そのスタイルを見て取りて
彼女も和みを感じけん
次第に變るまなざしも

親愛のものと覺えたり

(八)

そうでせうとも、さもありません
その日拙者のいで立ちは
縞の背廣に黒オーバー
靴、チョコレートも新らしく
結ぶネクタイ柄も良し
色、小黒きも男性美!
人は云はねど我は自負

(九)

彼女も夙に認めけん
恥らふさまに風情あり
慎しみ深き姫君も
人をそらさぬ笑み浮べ
「平へ、用事で参ります」
洗練されしアクセント
それに、いやますその聲音

(十)

我もし「喉自慢」に立會はゞ
鐘、三ツは鳴らすべし
飽かず顔立ち眺むれば
花の、かんばんせ月の眉
口紅濃きも嫌味無し

白粉、目立つも憎からず
我と似合いと人は見ん

(十一)

冬のスタイル、チウーピース
オーバーと靴は古けれど
時代の波では是非もなし
「平の御用は映画でせう?」
愚な質問と知りつれど
つきほ無ければ我は云ふ
彼女無言にニンマリす

(十二)

「ねえ、そうでせう」とあびせれば
「だつてえー」と彼女うなだれる
おゝ無理もなや是非もなし
今の女性の慰めは
映画に雑誌ホールのみ
彼女の好みは問はずとも
云はずと知れた先づ洋画

(十三)

傷んだ靴は見ぬとして
パーマネットにかくれたる
その、うなぢへと目をやれば
白き襟足なやまし、

耳の、たぶさへ櫻貝
たしなみあれど成れ男子
思はず、かたづ呑みにけり

(十四)

やがて汽車來し其の時は
その混雑を利用なし
ナイトのたしなみ我が權利
彼女の片手ソツと取り
混みし客車の人となる
もまれゝるその中に
互に寄り添い立ちにけり

(十五)

人の手前は他人なり
知らぬ顔にてありつれど
結びし片手はその儘に
愛の電流交錯す
我に離す氣ありとでも
なかか彼女が離すべき
向ける、微笑み手に力

(十六)

五の好みは洋画なり
「カナリヤ姫」を見たりけり
さても驚く、その筋は

コーヒー片手に聞きたりし
彼女の身にも良く似たり
そも彼女の家庭とは
磐城の國にかくれなし

(二七)

父上、追放にありつれど
家に巨萬の富のあり
母君、既に世には無く
一人の兄は戦死して
姉は嫁きて他家の人
その廣大の家屋敷
富を繼ぐのは彼女なり!

(二八)

父の愛をば一身に
自由の時代に尙自由
婿の選みは自からに
彼女に凡てを委すと云ふ
よくぞ選びし此の我を!
眼、高きは彼女なり
おゝ、美女と富我を待つ!
(一九)
さても、今宵は何處とせう?
湯本の町は人多し

氣安く行けるは「小瀧」なり

「小瀧」の宿の雰圍氣は

彼女の好みに合ふならん

安く上るも二得なり

さておしどり道中の御發足

(二〇)

湯本の驛迄トレラーバス
尙もバスにて「小瀧」迄
そこで彼女の云ふ事は
「ねーハイヤーに致しませう
妾バスなんて嫌ですわ」
あゝ、無理もなや、十人の
奉公人に、自家用車

(二一)

そこで拙者の答へしは
「僕もそうとは思いません
二台出拂い一台は
残念乍ら修理です
さは云ふもの、情けなし
ウフ、やがての其の時は
札束、かばんに自家用車
(二二)
日本水素を眼前に

山を背にして「小瀧」在り
館(やかた)の如きその構へ
和洋折衷建ち並らぶ
屋根の赤きが目立ちけり
前に立ちたる、美男美女
一副の名画、我等なり

(二三)

「小瀧」に入りしその時は
人をそらさぬ扱いと
彼女自身も應揚に
我家の如く振る舞ふは
けに賞讃に價せり
此の素晴らしき一室も
彼女の部屋には劣るらん

(二四)

運び來りし亂れ籠
重ねし二枚の丹前に
我れブキウキと喜こべり
それに引きかへ彼女なり
横目にチラリと見し後は
コンバクトの小鏡に
しきりにルージユ塗りにけり
(二五)

タイルの風呂場に只一人
風呂の加減も上々に
大理石の椽、枕とし
ソツと目を閉じ彼女待つ
「あたし後から行きますわ」
あゝ、恥らい気味のアノ言葉
彼女來たるを疑はず

(二六)

廊下の足音愛らしく
外のドワーを開く音

「こちらを向いては嫌ーよ」

「大丈夫ですとも、紳士です」

丹前拔ぐ音サラノと

やがてパチャノお湯の音

「暑くないこと？大丈夫？」

(二七)

「ほんとに綺麗なお風呂場ね！

ガラスの模様は何でせう？」

「そちらを向いてもいいですが？」

「えゝ、もういゝわ許します」

我れ感激して振り向けば

我れの隣りに彼女あり

此の美しの湯に我等のみ

(二八)

彼女、片手にタホル持ち

彼女の一部分にタホルあり

「ねえ、上向いて話しませう」

我、驚きて顔上げぬ

あゝ、白き肌、美の肢体

「ミルクの様な肌ですなあ！」

「いやん、そんなに見つめては」

(二九)

二階の廊下に並び立ち

夜の彼方に目をやれば

美しき星、銀砂子

不夜城の如きは日素なり

並ぶ町の灯「港の灯」

不知火の如く見受けたり

けに、戀語る夜に應はし、

(三〇)

「ねえ、御縁で不思議ねえ！」

妾、今迄いろ／＼と

ボーイフレンドも特つたのよ

でも氣に入つた人も無く

失望、覺えた人生に

貴男に逢へたの嬉しいわ

をゝ、ハンサム型の男性美！」

(三一)

我れその睦言に堪へかねて

その優肩に手を廻し

彼女をソツと抱き寄せぬ

うつむく、うなぢへ口づけし

体、起して、をとがいを

指の先にてあほ向かせ

デツとその目を見つめけり

(三二)

彼女もデツと我を見る

熱き瞳も、いぢらしし

上氣せる頬、薔薇色に

無言に口唇求むらん

けにその愛らしさ、その魅力

抱く片手に力入り

グツと彼女を抱き寄せり

(三三)

彼女も軽くつま立ちし

既に、うるみしその瞳

軽く目を閉じ口唇は

一分を開きて我を待つ、

あゝ月光は、まともより

その容はうを照すなり

おゝ端麗にして神々し

(三四)

デツと見つむる此の我は

長谷川一夫と双ツ子か

上原謙と、はらからか

今や情熱のせきを切り

熱き口唇ヒタと寄せ

彼女の口唇むさばれば

彼女も振へすがるなり

(三五)

やがて、口づけ終りなば

我が胸元に頬を寄せ

はぢらひ氣味に彼女云ふ

「わたし、本當に幸福よ！

生を受けたる甲斐あるわ」

「嘘つと、いつ迄愛してね」

「同じですとも僕だつて！」

(三六)

「わたし貴男のものなのよ」

「僕は貴女のものですぞ」

背なに廻した兩の手の

互の腕に力入り

又も口唇ヒタと合ふ

彼女のナニをチユと吸ふ

彼女も求めてチユと鳴る

(三七)

満月遂に三日月に

梅の香、邊りにふくいくと

寒さ忘れし二人に

雪しん／＼と降り來り

櫻花爛漫、紅葉す

暖流に沿いて飛び來る螢かな

その時片邊に聲のあり

(三八)

「何をまご／＼してるんだ！」

思い掛けない荒聲に

我れ空想より覺めにけり

こゝは泉のボームなり

憎き男の子を見返れば

年の頃なら三十路前

(三九)

はゝあ、判つた此の我が

彼女と語らふ様を見て

嫉妬の炎、燃やしつゝ

いづこの不良知らねども

何か、ねだらん心よな

その儀なれば是非もなし

引くに引かれぬ、あづさ弓

(四〇)

腕に覺えは荒浪の

猛き心のみ便りとし

いで、こやつ等と一合戦

さはさり乍ら待てしばし

我より、背いもやゝ高し

胸幅さへも、がつくりと

喧嘩こうばい、素早そう

(四一)

少しく、おちけふるへ來て

思案に余るその時に

我、姫君はのたへまり

「何を云ふのさ、ちぶんこそ

何處で、ぐず／＼してたのさ！」

アラ、コリヤコレ一大事

令嬢變じ、パンとなる

(四二)

その聲音さへ一變し

口唇引き曲げ毒付きぬ

「タバコも無いのしけてるね
もらつて、やるから待つてゐな
もし旦那、濟みませんけどモク一本」
我、呆然と差出せば

彼女二本に、彼二本

(四三)

タバコの穴箱受取りで
我れたちへと退りけり
その時、人のごはめきて
やがて來れる汽車の口
我れ、人混みに別け入れば
一人の婆ばあ、よちへくと
よるめき來り靴ふみぬ

(四四)

婆ばあは、我にすがりつき
いつかな離す氣色なし
もまれへる人混みに
テへ：成行とは云へ情けなし
うぐいす啼かせし昔無き
婆ばあの片手握りしめ
小瀧に向ふも夢なりき

短歌

日本水素 獨 靜 香

獨り身と元旦の朝誓ひしに何故にさわがす君がおもかけ
朝毎の君のほゝえみ胸を衝くつらきさだめの我にしあれば

君残る職場戀しき四時五分さみしき心叱りて歸る

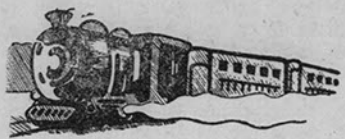
君が背に君知らぬ間にエフ付けて興無きわざにたむむるもあわれ

なんとなく君訪れる心地して部屋を片付く日曜の午後

次號豫告

小説 報 恩 孤 鹿野卓二郎

鹿野氏は人も知る、常磐地區に於ける文筆の雄で有り、且青年啓蒙運動にも重きを爲す人物です。本誌發刊以前に入會は載けておりましたが、その後本誌の乞を入れ改めて同人として席を置いて下さつた人です。此の度、小説「報恩孤」をお寄せ下さいましたが、中編（五十余枚）で有りましたので、二月號にスペースなく、残念乍ら次號に掲載する事に致しました。氏の小説は「港の灯社」として是を推薦申上るものです。會員諸氏も何卒三月號を期してお待ち下さい。



コント 『恐怖の十三分間』

東 義 將

常磐線Y驛と、一ツ隣りのI驛は、汽車
時間で十三分、途中に二ツのトンネルがあ
る。

人に美しいと云はれる十九の敬子が、T
市の産院に初産の姉を見舞つて、彼女がT驛終發の汽車に乗
つたのは、夜の九時十五分だった。丁度リビ―颱風の警報の
出た晩で、その夜は風は未だ出てはゐなかつたが、しとしとと
した雨に、無論暗い、大空だった。敬子は遂、産院の姉と話
込んで、それに、和服に足駄履きで、蛇の目をかきつけた姿で
馳け出すわけにもゆかず、時間一杯に、それこそ發車間際に
やつと間に合ふ様な乗り方をして、郵便車の一ツ手前の客車
に入った。

こんな天候の夜のせい、車内はガラシとして空いてゐる
此の終車が、近距離リ丈を走る爲か、此の客車の座席の作り
は、普通の客車の作りと異つて、只横に長く、しかも木製で
丁度、都會の電車の様な具合に出来てゐる。横に連らなつた

その腰掛けに全部でやつと七八人の人が、あちらこちらにか
けてゐる丈だった。

敬子は人々に離れて、隅から二間位の所に、一人しよんぼ
りと掛けてゐた。車内の電燈は、三ツ四ツが消へてゐて、莫
迦に薄暗く淋しかつた。敬子の位置に近い前の車は無人の郵
便車で、彼女に遠いうしろの車の方への閉められたドワーは
破れたガラスを補足した爲か、ガラスである筈の部合も、全
部が板張りにされてゐる。窓さへもガラス變りの板張りの所
が多く、そこから吹き込む雨交りの夜風に、ガラスに當る雨
足が、如何にも秋の夜を思はせてゐる。敬子は寒さと共に身
振いて、今日はちめて着はちめた、セルの着物の胸元をか
き合はせた。車内の人々は、誰も口をきく者も無く、煙草さ
へふかす人も無しに、皆、腕組みをして首を垂れ、目を閉じ
てゐる様子だ。併しその僅かな人達も、T驛の隣りのU驛で
三人が下車して、次のY驛に停車した時には、残りの全部が
降りてしまつた。

敬子は、車内にとり残された様に一人になつた。淋しさにガラス窓に額をつけて、窓外に目をやつた。人影もまばらな雨の夜の、驟の風景に見入り乍ら、今夜、襲ふかも知れない颱風の事を考へたりしてゐたが、いゝあんなに今夜は荒れ様もなさそうだつた。

一分間の停車で、汽車は再び動き出した。彼女は身を捻つて、自分の前に目を向けたが、思はず「アツ」と喉の奥で聲を擧げた。いつ来たのか、自分の真正面に一人の男が腰掛けて、デツと自分を見つめてゐる。脊せ細つた青白い顔に、不自然な黒い眼鏡。まばらに延びた汚ない髯、薄い髪の毛は節も入れた様子も無い。汚れた背廣の上下に、垢じみた曲つたネクタイ、軍隊の茶褐の雨衣を着て、泥に汚れたゴム長靴を履いてゐる。ステッキと云ふには、余りに粗暴な感じの櫻の棒の前に立て、その上に両手を重ね、身をしゃんと正して、デツと自分を見つめてゐるのだ。その瞳は、黒い眼鏡の奥にかくれて見られ様もなかつたが、その鋭さも思いやられた。年頃は三十七八か、いや四十五六にはなつてゐるのか、事實は敬子は、その年齢さへも、ハッキリと見極める事さへも出来なかつたのだ。何か此の男から、鬼氣と云つたものさへ感じられた。

敬子は、心臓が激しい動き處か、体が、ガタンと震へはじめた。眞向いに座つた男は、尙も自分を見つめてゐる。身動きさへもしないのだ。廣い車内には二人の他に影も無い

汽車はごう音と共に走つてゐる。併し、次のI驛迄は十三分もかゝる筈なのだ。

敬子はその不気味さ怖ろしさに、自分も身動きさへも出来なくなつた。汽車のスピード迄が、如何にも緩漫に感じられる。思い切つてソツと腕時計を覗いてみた。未だ、たつた三分きり経つてゐない。後十分をこうしてゐなければならぬのか。いやその十分の間に、此の男が、自分に挑みかゝつて来る様な氣さへした。自分が腕時計を見た事さへ、いや、自分の一舉一動を、此の男は見通がすまいとしてゐるのだ。車掌さんでも、乗客でも誰か人が入つて来て呉れれば、と考へたが、併し雨の夜を走る、こんな空いた汽車の中を、歩き廻る人影などはあるわけもなかつた。

此の男は、確かに自分に何かしようと思つてゐるのに異ない。やがて敬子に、汽車が第一のトンネルに入つた事が感じられた。夜の車内は、トンネルの中も外も別に變りはなかつたが、今が、トンネルの中だと思へば、敬子は一層恐怖を募らせた。

突然、前の男が立ち上つた。スィツと音も無く立つたのだ。敬子は「アツ」と、小さな叫びと共に、体をすくめて、只、両手を前にかざして、無意識にその男から自分を護ろうとの姿勢をとつた。心丈は、その男の前から遁れ様と焦つたが、体は動く事さへ自由にならない。

併し男は、只デツと敬子を見つめてゐる丈で、別に彼女に

挑みかゝる氣配もない。やがて、男は何思つてか、敬子の恐怖をよそに、再び——今度はドシンと、板のシートに腰を降した。併し敬子は、とてもホツとする處ではなく、却つて、もしや此の男は、氣狂いなのではあるまいかと、一層恐ろしさを深めていつた。恐怖の數分、それは實に敬子にとつては永いものを感じられた。

やがて、又汽車は第二のトンネルに入つたのだ。敬子は心に只、神に祈り、その救いを乞つてゐた。幸に男は、今度は立ち上る氣配も無い。併しデツと動かすに、自分を凝視してゐる事には變りはない。敬子は未だ三ツ先の此の汽車の終点迄乗つてゐなければならぬのだ。併し、此のトンネルさへ出外れれば、もうI驛も近いのだ。敬子は、I驛に着き次第すぐに此の車を降りて、人の多い他の車に轉じ様と考へ乍ら恐怖に震へる心を静めてゐた。

雨に濡れた窓ガラス越しに、点々と見えるI驛の燈火、敬子はやつと救はれたと考へた。それに勵まされて、勇氣を起して起ち上ろうとした。處が、又も突然男が立ち上つた。敬子がハツとして身を引くと、今度は、敬子などは無視した様に、クイと右に身を向けて、靜かに音も無く、入口に向つて歩いてゆく。

此の男はI驛で降りるのだろうか。もしや、既に自分が他の車に移ろうとした氣持ち迄も察してしまつて、飽迄、自分につきままととするのではあるまいか。やがて汽車が、I驛

のホームにすべり込むと、男の姿はドワーの影にかくれた。停車した乗降口の處で、「Kさん、今歸りかい」と、ホームでしゃべる大きい聲がした。確かに今のアノ不気味の男に誰かが言葉を掛けたのに異ない。底い返事さへも聞きとれた。入れ違いにドカ／＼と人の足音がして、數人が乗車した。それは正服の四人連れの驛員だつた。敬子はやつと、現實の世界に呼び戻された氣さへした。彼女はやつと、恐怖の十三分から開放されたのだ。

今乗つた中の、年輩の驛員が仲間云つた。

「あゝやつて毎日、I村を出てY町の温泉宿を廻つて、いつも此の汽車で一人で歸つて来るんだからなあ……別に、間違も起さないんだぞ。耳もかなり遠いんだ……」

確かに、今の男の事を云つてゐるのだ。敬子は思はず聞き耳を立てた。……やはり狂人であつたのだろうか……

併し、それに答へて一人が云つた言葉は、「成る程、二重苦と云ふヤツだな——併し、按摩さんは今、いゝ金になるんだらう……」

——(終り)——
——二〇三、一〇、七、リビ—颱風警報の夜——

吾子

東 黎 明

「お父ちゃんの馬鹿」とひとことたはむれしあとすまなげに立つ吾子は四才にはむれるを本に成るのと聞かすればペン執る我におとなしく寄る吾子
今日からは七ツと喜ぶ吾子の春にお宮参りと秋の衣憂ふるも妻

舊正月を前にして

新正に濟ましたりといつて語る妻の傍へにげんなる吾子

隣家の犬を愛す

小母ちやんが病氣だからその間由美ちやんがマルのおしつこをさすの生活苦増す借銭の一ツ／＼に別れんと語る妻の友哀れ

貧故に別れんと語る妻の友に貧は互と喉に迄出る憤どほり

肥馬車の上に微笑むは妻と子かたづな持つ人の高く語らいて過ぐ

そろばんと原稿用紙見つめつゝ雑誌發行に力無き我

機關紙と發行されしガリ板に文化の水準見せらるゝも淋し

小夜更けて浪音高き寒き夜を歌いて過ぐる人の有りたり

更けゆきて靴音高く過ぐる人の何用有りて何思ふらん

川添美佐枝君靈に捧ぐ

逝きたりしは若き女性の友なりき計報片手に涙し見返す

我がふみを樂しみ待ちし病みしひとに約なさずして旅立たれけり

隨筆

文筆に親しむ迄

柏 浦 角 治

筆を執ると云ふことは面倒なものだ。況して大それた小説など、それが主幹東氏の創刊前の自分への要求だつた。

何でも良いから書けと云ふ。書けないわけはないから書けと云ふ。無理な事を云ふ人だとも思つた。併し「こんな話はどうだろう？」と、自分が相談したのが、前號の「地獄船の六ヶ月」の筋だつた。處が、夜十時だと云ふのに、原稿用紙を開いて「話した通りに書いて見ろ」と云ふ。書き置る自分に棒書にしろと云ふ。はちめの晩は何でも十八行程の棒書だつた。次の晩に必ず来いと云ふ。まるで學校の先生の様だ。しぶ／＼出かけた二日目、前夜の十八行は、自分の考へも書き加へ、又東氏の口添へもありで、原稿紙二枚程のものになつた。それにかゝつた時間は二時間。三日目の夜が昨夜の二枚を新しい原稿紙への正書で、一行づゝ明けて書かされた。東氏はその間、自分でもしきりに書いてゐる。十枚位はすぐ書いてしまふ。處で自分の方へは、その文の間々へ、又文を入れると云ふ。

「どんなフーにするのか？」と聞けば「例へば望遠鏡を取り合つてとあるのを、新しいとか、汚れたとかを現はしなさい」と云ふ。「望遠鏡を取り合つて」が「古く汚れた望遠鏡を取り合つて」となり「取り合つて」が「奪ひ合つて」になつた。その夜はこんな要領で、前のものが原稿紙の四五枚に變つた。どうやら小説の様なものになつて来た。はちめは大變な事を初めたと思つてゐた自分にも、大分興味が出て来た。四日目、五日目、東氏に譽められたり、おだてられたりして小説學校いや作文學校の夜學に通つた。行かないと迎へに来る。然し、自分の書いたと云ふものは、幾度讀んでも妙に飽きないものである。只、一々正書させられるのは實に閉口した。今でも是丈は嫌だと思ふ。然し、原稿が讀めなくなつてしまふからは是も仕方か無い。そんな具合で、六日目に、七八回の正書で出来上つたのが「地獄船の六ヶ月」だつた。

然しまだ自分には、下手、上手を別にしても、小説どころか、文を作ると云ふ自信も生れないが、どうやら面白味丈は判つて来た。

自分に、二月號にも小説を書けと云ふ友人もあつて、是には恐れ入つた。然し自分はフト考へた。實はある友人の所で自分を面白い人間、愉快な男と思ひ込んで、自分が行くと笑はせられ様と待ち構へてゐる家がある。是には全く弱る事がある。誰にしたつて、いつも愉快な事ばかり無いし、笑つてばかりゐられない事もある。そんな時にはこつちでも恐れ入

つたが、それでも行けばどうやら笑はせて歸つて来る。時には苦しがつて、先に種を考へて出向く時もある。然し結構笑はせて歸る。又自分でその時の空気にとけこむ事もある。それを自分は考へた。文を作ると云ふ事は此の要領だと思つたつまり早く書きなれる事だと思つた。脳の良し悪しは元よりだるうが、是も修業する事によつてかなり異ふものになるのだ。いつも東氏に云はれても呑み込めなかつたそんな事もやつて見て、どうやら判つて来た。

又こんな事も思い出して見た。

昭和十三年頃、自分は東寶の調理部に務めてゐた。御存知の京橋歌舞伎座だつたが、アノ當時のあそこの観客は、當時日本で指を折られるお歴々の人物や、貴族富豪の連中だつた。それ等の人は、社交上必ず、大食堂に姿を見せたが、特に華やかなのは宴會の時だつた。處がその紳士淑女の中には表面丈が紳士淑女で、中には洋食の作法、つまり洋食の本當の食ひ方を知らない人もゐて、サモ何氣無いフーを装へてはゐるが、心中甚だ困り抜いてゐる様な連中も居た。我々食堂の係りの者は、全部「洋食の作法」を書いた小型のパンフレットを渡されてゐて、誰でも就職當時は、熱心に勉強？研究したし、それに實際についても、見たり實行したりしてゐたので、皆一應の心得丈は出来てゐた。そんなわけで、我々の目から見たそれ等の人は、とてもをかしく妙なもので、いつも我々の笑ひの種になつてゐた。處がある時こんな事がある。

つた。

ある大きな宴會の晩だつた。殆どの人が宴會の席に着きはちめたのに、一人美しく着かざつた、未だ可愛い、感じの美しい、十七八才の令嬢が、両親らしい人の前に泣き顔をして席に着くのをしぶつてゐる。如何にも未だ社交に順れないと云つた様子だつた。そこを自分が通りが、つたら、その父親らしい人が聲を掛けた。

「ボーキさん、妙な事を聞く様だけど、今夜のお料理は、やはり箸を付ける作法があるのかね？」

小聲で聞く。何でも作法の大ありの洋食だと記憶してゐる。そのお嬢さんばかりか、その立派な両親迄、大分怪しいらしい。

「ハア御座います」

自分はその通りを答へるより仕方が無かつた。心にこんな苦しみを造して出席する事もなからうのにと思ひ乍ら、通り過ぎ様とした自分の目とお嬢さんの腫が合つた。自分はフト戻つて、自分の持つてゐた、例の小型のパンフレットをその父に渡し、そしてその夜の料理の名を三ツ四ツを出る順に教へて「お歸りに戴きますから」とそこを離れた。

宴會はたけなわになつた。例のお嬢さんとは見たら、お嬢さんをまん中に、左右に御両親。お嬢さんの膝の上には例の「虎の巻」があるらしく、御両親の方は、盛に圍りの人と談笑を交し乍ら、宜しくお嬢さんのカンニングを見習つてやつ

てゐる。少しも不自然の所が無い。關係の無い自分も大いに安心した。

自分がその近くに行つた時、お母さんの方がチラと自分に目禮した。感謝の意味だろう。お嬢さんの方も、チラリと自分を見て、はにかむより、むしろいたづらそうな目付きに自分に微笑んだが、甚だ愉快そうである。自分も嬉しかつた。親父の方は、もう自分への恩なんか忘れてしまつて、まるでアメリカに十八年もゐた様な顔をして、バク／＼やつてゐる。併し、歸りには特に呼ばれて感謝された事は云ふ迄もないつまり此の話は、どこからどう手を付けていゝか判らなかつた事が、一寸したもので自信がついて、一晚を恥をかく事なしに愉快に過したと云つた様な簡単な事情だ。又果して、自分が貸した本と、當夜の料理と正しく當てはまつてゐたかどうかは知らないが、要點は、つまり一寸した自信を興へられたと云ふ事が、完全にやつてのけたと云ふ事なのだ。つまり文を作ると云ふ事も、是と同じなのではないだろうか。自分の考へは異ふかも知れないが、書けないものも書いて見る。そして良く書く人に見て貰ふ。訂正される事もまた爲になる事だと思ふ。そして一ツのものがまとまる。ある程度の自信がつく。又書いて見る。面白味と自信はきつと進歩する事になるだろう。人が認める、認めないと云ふ事は別問題として自己満足する丈でも、自分の人生に大きな收穫であろうと思ふ。

自分は東氏を、辭引とも虎の巻とも思つて、いや先生と考へて、うんと書いてそれを見て貰ひ、早く自信を付け様と思ふ。近くに東氏の様な人が居る事を幸だと思つてゐる。いや「港の灯」が現はれた事は實に嬉しい事だと考へてゐる。我々青年は、「港の灯」をうんと利用して、お互の投稿で、「港の灯」の誌面を埋め、日本中に郷土の文化を誇り度いと思ふ。

—(完)—

移轉お知らせ

長らく御不自由をかけたことが
漸く店舗の改装を整え
皆様の御来店をお待ちして居ります
倍舊の御引立をお願ひ致します

ペーマネット
和洋結髪
婚禮 齋付

武藤美容院
武藤イノ

小名濱町船引場二七
電話 五二番

祭日「成人の日」の回顧と元服考

東 義 將

一月十五日が、今年から新たに「成人の日」として祭日の中に入れられたとは、迂濶の話だが自分は當日迄知らなかつた。自分が知らなかつたから云ふわけではないが、同じ祭日の中でも、此の祭日は將來共に此の日に對する識者の氣構へと、青年自身の自覺が無かつたら、遂に無意味に終るばかりか、國民に閑却され勝になりはしなかるうかと案じられる。確かにその意義は仲々重大である。又それ故に國家の祭日の中にとり入れられたものには相違ないが、例へば他の祭日が一月一日は「新年祭」であるとか、四月二十九日が天皇誕生日であるとか云つた様に、皆讀んで字の如くで、一口でその祭日の意味が明らかであるのに反して、此の「成人の日」が、新たに制定された祭日と云ふばかりで無く、此の祭日が國民に徹底される迄には、是を語るのに一應の解釋と説明を要する様に思はれる。然らば何故にこう云ふ

祭日が定められたか。勿論、成人した人の爲に祝つてやる。又青年自身も、満二十才への成人と共に公民權も附與される即ち社會的にも一人前になつたと云ふ自負と責任感を自ら植へつけると云つた意味に異ひなかるうが、どうも此の目的の爲には、唯に、祭日の制定丈では、何か物足り無い様な感じがしてならない。

元來我が國には、昔は少年から成人に移るのに、武士階級では元服と云ふ儀式を行つた。併し元服は、成人への儀式とばかりは一才受け取り憎い處もある。確かに成人への式には異ひないのだから、いくら昔の人が偉くとも、余りに元服するの年の若過ぎる場合も、その例が仲々多いのだ。十四才で初陣と元服をした様な人さへある。環境や種々の事情に寄つた事も亦事實であるらしい。一口に昔と云つても相當古くから行はれたもので、自分はその濫觴を知らないが、源義家がある事は有名である。自分は此の八幡宮を鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮と記憶してゐる。併し書物の中には「頼義神恩を謝して鎌倉に八幡宮を建つ」ともあるが、併し恐らく頼義の立派な神社建立に先立つて、鎌倉に原形を八幡宮があり、前九年の役への出發に先立ち、軍勢が同社を拜し、頼義の子義家の元服も亦、行はれたものと解釋しても至當である様に思はれる。いづれにしても、前九年の役、後三年の役では、當時の権力者藤原氏が、源氏に對し、鎮定の効に報ゆる處が無かつたの

で、源頼義、義家の父子が、自から己れの財を投げ出して、家の子郎黨、あるいは付き従つた人々を籠らつたが故に、源家の勢力を東國一圓に扶植する、因を爲した事は史上余りに有名な事である。然りとすれば衰へたりと云へども藤原氏時代の事である。そんな事から考へると、元服はあるいは是も大陸からの外來の習慣であつたかも知れぬが、是を我國のものらしくしたのは、豪族、莊園の時代に、武家の興隆と共にその社會の威容を整へると云つた様な事から、改めて出發した儀式ではあるまいかと考へる。年齢など云ふ点では、余り省みられなかつたらしく、常識的には、十五六才を以つて行はれるが如くであつた様だが、それとても正しいものではなかつた様だ。赤穂義士の中の大石主税良金が、十五才の仇討で十六才の切腹だつたが、是が元服前であつた事は兎も角として、一ツ年上の矢頭衛門七が、十七才の切腹で、當時としての見方で、アレ丈の事をした人間が遂に元服前の姿の儘で死んで行つたのだ。又中には、その前髪姿の美しさ、いはゆる美童振りを愛されて、いつ迄も元服前の姿で居た様な人々もある。織田信長の小姓で、本能寺の變で有名な森の三兄弟、蘭丸、坊丸、力丸が小姓姿であつた事は人も知る通りで、長兄の森蘭丸の如きは、確か二十二三に達してゐた様に書物によつて記憶してゐる。

元服前の美童振りが因を爲して、是に伴つての男色の流行即ち武將と小姓、青年武士と元服前の少年との朋友の交はり

等、そうした風習が怪しまれなかつた時代のあつた事は、本を讀んだ人なら誰でも知つてゐる事であるし、又元服とは、直接に關係が無い事なので茲では割愛する事にする。

此の元服の儀式と云ふものは、徳川末期迄、當然チヨン醫時代迄正しく残つてゐたものである。武家は是を仲々重要視したもので、元の小學校の讀本の中にも元服の式の時に武功ある人の戦場の談話を、元服を受ける當人に聞かせて、祝の言葉とした事が乗つてゐた様に記憶してゐる。話の筋は、一人の武士が元服の式場で、己れが曾て戰場で見(まみ)えた奥床しい敵方の武士を讃へての評語をすると、丁度その家に手傳いに來てゐた一人の浪人者が、はからざりきその相手であつて、再會して喜ぶと云つた様な筋だつたと思ふ。

此の様に元服も、武士階級の中では尊とばれた儀式ではあつたが、驕つて是を農民や町人に見ると、余りハツキリとしてゐない。勿論町人だつて、前髪を落す、つまり武家の元服に等しい事を行つた時には、尻頭付きに赤飯位の事はやつたのには異ひなかるうが、どうも此の方は割然としない様である。勢い祝の酒の後を、江戸なら吉原に繰込むとか、京なら島原に出掛けるなどと云つた具合で、多分、余り譽めた事をやつてゐなかつた事に原因するのではあるまいか。物の本の中にも自分は町人の元服を書いたものを知らぬが、自分の知る範圍ではたつた一ツ西鶴の「好色一代男」の中に是を見る事が出来る。例の世の介が、その美童振りを愛され、振り袖姿を惜

生まれ乍ら、十五才位で元服した事が出てゐるが、アノ本を讀むと、あの早熟な世の介が、早く成人としての姿を欲して自から元服した様な妙な印象を受ける。

又、元服前だからと云つて是を一人前に扱かはなかつたと云ふと、必ずしもそうでは無い様である。但し先づ戀愛の世界などに限られた様な場合で大して譽めた事では無かつた様だ。前述の大石主税良金の仇討當夜に於ける裏門の大將等は父内藏助良雄の舊職、即ち過去の我家の格式が爲さしめた様で、此の様な場合は別として、そうした事を除いた他は、大抵の場合戀愛の場合にのみ限られてゐた様である。「好色五人女」の八百屋お七の相手役、寺小姓吉三。又は例の近松門左衛門のお染久松の久松、皆然りである。只明治以降の人々の書いた様なものは、例へば樋口一葉の「竹くらべ」であるとか、室生犀星氏の小説の中にも見る様なものは、皆、春知り初(そ)める頃の物語は、比較的、精神的の方面のみ扱つてゐる様であるし、長谷川四迷、即ち二葉亭四迷氏の「平凡」などを見ても、只思春期の性の悩みなどを多く取り扱つてある丈だが、處が昔の文筆に現はれた是等の少年は前髪姿で、大いに戀愛振りを發揮してゐるばかりか、肉体的にも宜しくやつてゐたらしい。尤も「世界」も無ければ「國家」も無いのはゆる無事泰平の時代で、他に能も無いから勢い智腦の低下と共に、そんな方面にばかりに發達して、そんな少年も存在したのであらうし、又作者が、そんな事書いても怪しむ

その意味で、今度の祭日「成人の日」が、そう云ふ制度の無くなつた今日、國家が苦しがつて制定した祭日の様な感じがしてならない。勿論前述の如く、成人を國家で祝ひ、成人自分からもその自覺を深める區切の日を爲すその意義は自分も充分に是を解するが、自分の考へとする處は、むしろ此の日の前後を期して、國家で一齊にその年齢に達した人の体格検査を施す事を提唱したい。勿論その費用も大きい事であらうから、國家の財政に、些かでも明るい面を見られる様になつてからでも結構である。過去の徴兵検査に於ては、性病などをしよつてゐた人間は、恥を搔くものとして、そんな連中は、大急ぎの治療を施して、遂に、間に合はなかつた奴丈が、人前で恥を搔き、且、おどかされたりしたものであつた。そんなわけで、徴兵検査以前は、青年が相當自肅した事も事實であつた。又、何も性病なんかやつてゐるのを人前に知られるなど云ふ事は、徴兵検査に限らず、恥を搔くのは當然の事で、又國家の發展に、あるひは人類の福祉の上から云つても是程害を爲す病氣はないのだ。肺病などと異つて、此の病氣ばかりは、自から招くものと殆どを斷定出来る事丈に、是程の弊害は無いと云ふ言葉も使へるのだ。以上の如く、体格検査なるものが國家に存在するが故に、少しでも青年達に自肅と制肘を與へ得るなれば、國家としては程の喜びは無い筈である。勿論その検査を區切りとして、青年の安心感からその反動が來たのでは是も困りものだが、併しそれ以降は、既

ものも無かつたものであらう。尤もそんな醜物ばかりは喜ばれなかつたと云ふのか、又飽きたとでも云ふのか、その反動として大衆に拍手喝采で迎へられたのが、例の曲亭、瀧澤馬琴の水滸傳の焼き直し「南郷里見八犬傳」であつたのだ。尤もお染久松の如きは、あの原作の因つて來たる處と云ふものは、大阪の酒屋の小僧の九ツか十位の久松と云ふ子守小僧が、二ツか三ツのお染?と云ふ主人の子供を、落したか何かして、主人の怒りに觸れ、倉の中に入れて叱責されたのであるいは死んだのかも知れないが、そんな事が原因だつたのを、近松が宜しくあゝ云つたものを書き上げたのださうだから、原型が九ツか十では、いくら近松でも前髪位つけてをかなかつたら義理が悪かつたのだらう。尤も、そのせいもお染久松の筋には、倉丈は大いに用いてゐる。

些か余事に涉つたが、成人への「區切り」をサテ、現代に是を見れば如何かと云ふと、敗戦になる迄は、我國には徴兵と云ふ制度があつて、大いに是に役立つてゐた。併しそれとて別に、ハッキリとそういつたものではなく、又、徴兵検査の目的自体が、そんな事を意に介したもので無かつた事は、國民の良く知る處である。併し、それはいづれにしても、過去の時代には「兵隊検査も過ぎないのに」とか、「検査前から煙草を吸つて」とかの言葉があつた様に、徴兵検査が國民自づからが成人、つまり一人前の人間として社會が扱かふ一過程としての大きな意義を爲してゐた事は事實である。

に成人した個人の自覺と反省に俟つより他に仕方が無く、勿論是にも、識者の善導の必要は云ふ迄も無い事である。

又國家にしても、一錢五厘の兵隊を必要とした時代には、体格検査なるものを施行して、その必要の無くなつた今日では更にそうした事を省す、唯に「成年の日」位の祭日を制定してごまかして置かなざは、實に言語同斷、以つての外と云ふべく、青年を省みないも亦甚だしと云ふべきである。

祭日「成年の日」を以つて、國家適齡青年の体格検査を行ふ。例へ既に大隊と云ふ事の無くなつた今日と云へ共、必ずや意義ある事と自分は是を考へる。又軍隊教育の必要は皆無の今日ではあるが、或る程度の、又例へ短期間であつても、團体生活に對する訓練を施す事も特に國家眞の危殆に瀕する現代青年層にとつても、大切な事であると考へる。自分は何も、過去の軍隊生活の夢を追ふものでもなく、まさか、スパルタ式の教育を我國現代青年に望むわけでは決してないが自分は只、そうした事を望ましいと思ふ丈である。併し是も個人の自由を尊重する時代になつては無理な事であらうか。前述の自分の論は兎も角として、毎年來たる祭日「成人の日」を意義ある一日に終らし度く、否むし、青年に寄る國家再建に役立つ日も爲し度いとも希ふものである。又「成人の日」に對して、近く五月五日の祭日「子供の日」を迎へるが、此の日も、將來の我國を背負つて立つ子供のために、心から祝ひ、而て一日を有意義に終らせ度いと希ふものである。



筆 隨
光を戀ふ
新妻 渡

太陽の光線は我々人体に神秘なる榮養を與へるもので有る。併し又精神に及ぼすその影響は精神文化の面に多大なる榮養を與へる事が思考される。

又太陽の影響！即ち氣候風土に依つて人間の性格が左右される事も大きなものがある。寒冷地帯の民族と、温暖地帯の民族とを比較した場合、智識の点は兎も角として、精神文化の面ではかなりの相違点を見出す事が出来る。例へば、東北人は淳朴だとの言葉を私は耳にするが、併し私は之に領き難いものがある。成程ミレーの名画「穂拾ひ」の如き宗教的な迄の明るい淳朴さは持たなくも、確に外形的な淳朴さ丈は見る事は出来るであらう。然し精神的には排他的であり、因循であり、且猶疑心が強い様に考へられる。之は社會的な冬眠期間が永く、空は暗雲におゝわれ、爰は屋根を叩き、丈餘の雪は門を閉じ、勢ひ太陽の慈光を浴する事の出来ないウツトウしい毎日が續くのである。しかして人と人の交際も自然遠くなり、文化の交流の機會も尠く、無意識のうちに排他的となり、猶疑心強く因循となる結果を生むものと思はれる。温暖

の地に向ふにつれ、自然太陽の光に浴する期間が永く、之に比例して精神文化は向上し、性格は開放的であり、且進取的となる。前述した事を心理學的に解剖すれば、光が絶対とは言ひ得ぬかも知れぬが、併し、精神文化の面に光がもたらす大なる効果を、私は強調するものである。例へば某國人の如く、陰險！残忍！熊の如き鈍重なる非文化的神經は、各將軍がもたらす好箇の適例であらう。

又戀愛の世界にせよ、太陽の光が燦々と降る白日のもとに於ける相手に對する戀の告白は、正しく眞剣であり、其の告白が例へば雅拙な言葉に終始したにしても、必ずやそこには心の全線に觸るゝ何物かあるであらう。僅かな灯陰をも嫌い暗夜を選ぶが如き戀の私語（さゝやき）は、例へばそれが相手を有頂天にさす巧言であつたにしても、必ずそこには眞剣さを欠く不健康な邪戀が多いこと考へられる。

又太陽の光線によつて、光を發する月の光、即ち月光は我々の心を淨化し、且詩的とし「あゝ、良い月だ」と月を仰ぎ見る老人の表情にもロマンチックなものを見る事が出来る。月に對する感激が我國の名曲、瀧廉太郎の「荒城の月」となり又ベートウヘンの古今不朽の大作曲、「月光の曲」を生んだものである。又文筆家は月光をテーマとして、實に枚擧にいとまない迄の作品を出して、我々に深い感銘をあたへてゐる。太陽の光が躍動的であるならば、實に月光は靜的であり詩的であり、且女性的な愛のシンボルとも云ふべきである。

物質文明の進展と共に、精神文化の向上には人工的「光」が並行して見逃せぬ事實であらう。例へば人工的な光にせよ、光が増すほど心が明るくなる事は、何人も強く感じる事實である。喻へば、停電した場合に子供達は、デットと炭火を見つめ、只沈黙するばかりで有るが、一度（たび）バツと電氣がともるや、瞬間彼等は目を輝かせ歡聲を擧げる。之は人類が光を戀ふ自然の現象でなくて何で有ろうか。光！光！光！私は光を讚へ、しかして光を戀ふものである。

病床貳週を経て日光を浴びつゝ、 一九四九、一一、一七

初 春 小野寺 ヒメ子

うつろなる我にしあれど初春を迎へてひとり松かさりせむ
去年よりのつもる憂ひを洗へかしとぞ降りくる初春雨
初春は我心にもほの／＼と光さすごとおとづれにけり

針の麥 やすを

針の麥あの窓いつも閉されて
冬の山蘭の實のから折れば鳴る
海荒れて北指すぐみの枝ふるふ
北風吹く道急げば潮騒片方に

迎 春

〔古書高價買入〕

新 大衆讀物
少年少女讀物、小磯商店
刊 エ マ ホ ン ガ

小名濱町本町一

迎 春

喫茶 時 雨 莊

五十嵐 勝

〔うごん委託加工仕ります〕

小名濱町中明神町九番地

迎春

醫藥品、衛生材料、度量衡器、計量器

關内資生堂

關内仁平

小名濱町中明神町五番地
電話(小名濱)一四七番

迎春

尾城寫真館

婚禮見合其の他記念撮影は親切丁寧
の當店を御利用下さい
……(出張撮影は遠近に關はず承まはります)……

小名濱町本町通り
電話(小名濱)一〇四番

迎春

荒物、煙草、雜貨

文屋商店

小名濱町古港
電話(小名濱)三四六番

ゴム靴とタイヤ修繕は
優秀なる新田の技術で
初めて御満足を得られます
ゴム製品修理専門

新田ゴム更生所

小名濱町西二八二番地

連載長編小説

吹雪を衝く (第二回)

東 義 將

四、春日と静子

青函連絡船松前丸は、今靜かに青森の港を離れて行つた。遅延に遅延を重ねて、午後四時の出航が、青森の港を一目に望まれる頃には、もう五時を少しは廻つた時刻だつた。

暮れるに早い雪國の港町、遙かの彼方に横に一行、点々と並べた星にも紛ふ電燈が、雪の港にキラ／＼と美しかった。既に雪も止んだ大空に、三ツ四ツの星さへ見えてゐる。

春日は、遙かに青森の街の灯を望み乍ら、中デッキの手すりにもたれて、デツと靜かに煙草をくゆらしてゐた。

二三千噸はありそうな船丈に、大したローリングも感じない。寒い事は寒かつたが、併し、三等室のごつた返す様な騒ぎの中より、此の靜けさが、彼にはどんなに良かつたか知れなかつた。

段々と遠ざかり行く青森の灯。彼は今、先程の待合室での出来事を思ひ浮べてゐた。先程の親子は、どの邊に乗つたらうあの騒ぎで、あの親子の連れが、必要以上にあの人々に立ち入つてゐる事を知つたが、無理にでも、あの人達を東京に歸してやり度いと考へたりした。併し、そうなれば、當然アノ大島とかの深い怨みを買ふ事も覺悟されたが、その方はさして苦にもならなかつた。併し、自分が是以上あの親子に積極的な態度を採らなかつたとした處で、さつきの事丈でもう充分にアノ大島の恨みを買つたであらう事丈は覺悟される。併しそんな事より、あの大村と云ふ人が必要とする丈の金額をどんな風にして、あの人に受取らせ、そして自分も恩を賣らずに済むだろうと、そればかりに頭を使つた。

大体彼の今度の旅行は、彼の屬する横濱の某機械製作會社から、北海道の炭礦會社へ納付した、ある大物機械の据付工

事に向ふ途中で、一行はその出張職工で、彼はその監督だったのだ。若いに似合はづ、實に人を使ふに妙を得て、彼は殆ど此處數年を、こうした仕事に従つてゐた。近くは名古屋、大阪から、遠くは滿洲、臺灣、南洋迄、是等の職工を連れて出歩くのが彼の仕事だったし、今の顔觸れの殆どが、いつも彼と行動を共にする連中だったのだ。

彼等は種々の意味で、ヤレ喧嘩だ、ヤレ病氣だと、あるひは金錢問題などと、彼に世話になる事が實に多かつた。そんなわけで、彼等は次第に彼に親しんで、春日を慕ひ、いつか彼等らしい感情から、春日を崇拜して「見貴」などと呼方をもつて慣ひとした。

それ丈に、彼等は春日の云ふ事は實によくきいて、全く統制の取れたグループだった。春日も亦、時には彼等を止むなく叱る様な事なぞもあつたが、事毎に肉身の如くに、心を配るし、時には彼等と共に酒も呑めば、又例へ、若い連中が女遊びに行くときでも、差丈へ無い限りは、

「俺にも、たまには好い女を紹介しろよ」

位の冗談で、氣持ち良く送り出した。外國映画にも通じてゐたし、元來、仲々の讀書家で、おまけに花札など云ふものも知つてゐると云つた様な男で、彼の人情の深さや、持ち前の勇氣は、若い連中にばかりか、時には關係の無い第三者にすら發揮され、その腕ツ節の強さと共に、そんな事も度々見せられて知つてゐた彼等は、眞面目な人が聞けば、大し

て感心出来ない春日ではあつたが、彼等にとつては飽きの來ない、實に理想的の快男子だったのだ。

唯、血氣旺んな連中の旅勝の生活は、時には、彼等を荒ます事はあつても、如何に彼等が、自分から不良がかつてみても、根は皆純真と云へるものを持つてゐたのだつた。

薄暗い廊下の電燈の下を、誰か春日の方へ近付いて來た。自分を見て立止つた氣配に、フト彼が見返ると、それは思ひ掛けない先程の娘、春日も名を聞き知つてゐた靜子だった。

「あゝ貴女でしたか！」

彼が言葉を掛けると、彼女は、靜かに彼に近付いて、

「先程は、いろ／＼と濟みませんでした。貴男に御迷惑を掛けてしまいました」

「いや、僕こそ、思ひ掛けない迷惑を掛けました」

彼も、思つたより明るい彼女の瞳に、安心して言葉を返した

「併し、不愉快の思ひをさせましたね。恐かつたでせう？」

彼は微笑と共に訊いてみた。靜子も、淋しげな微笑みを浮べて、「エ、」とは肯づいたが、チラと彼を見上げて、眞實な表情に

「あの！貴男が、お怪我なさるかと思つて心配致しましたわ」

「有り難う——。」やがて彼はしんみりと、

「それよりお嬢さん、お父さんを炭礦で働かす事なんか無理なんですから、東京に歸る様になさるんですね」

「ハア、私も反對したんでしたけれど、もうこゝ迄來てしま

いましてはどうなる事で御座いませんし、それに、お聞きの様なわけで御座いますから——」

「なに、歸る方法なんていくらでもありますよ。併し、一休何處の町へ行く豫定なんですか？」

「あの！それが、父母も私も良く存じませんのです。何でも本社のある土地では無い様な話で御座いました」

「××炭礦なら、本社は空地の國Y町にあるんですが、何にしても一寸妙な話だな」

彼は、そうはつぶやいたが、併し彼も時には礦夫がそんな風の話で來る事も聞いてゐた。

デツキには二人の他に影も無かつた。

春日は靜子に問はれた話の糸口から、自分の立場も語つて聞かせた。當然、自分の境遇も簡單に話した。二十八の今日、未だ獨身で、しかも旅勝の生活だと云ふ事や、兩親は早く去り、既に人妻になつた妹が一人ある丈だとも話した。

直きに横濱へ——尤も一行の大半は東京の者だつたが——一同を連れて歸ると云ふ事が、靜子には相當の氣安さを與へて、それに春日の淡白な、物に拘はらない性格は、靜子にも一層良い印象を與へたものか、彼女は春日が思つたより、はるかに明るく、そして親しく口をきいた。そしていろ／＼と自分の身の上も語つて聞かせた。

彼女は今、二十一だと云ふ。芳夫と二人丈の姉弟で、他に兄も姉も無いとの事だつた。女學校の旅行位きり、さして遠

くへ出た事もなく、東京の生活きり知らぬと云ふ。今度の北海道の話も、父母もはぢめは氣が進まなかつたし、彼女も随分反對したが、どうしても金を返さねばならない相手があつて、その人から大島を紹介されたもので、金を借りる迄は父も大島の顔さへも知らなかつたとの事だつた。靜子は、彼女の父が金を借りた相手は、炭礦會社であると話したし、又心から、そう思い込んでゐるらしかつたが、聞いてゐた春日には、どうしてもそれが會社から出た金だとは考へられなかつた。大島個人の事に違ひないと思はれた。

併し靜子は、春日と語つて氣も晴れたか、話せば朗らかな娘だつたし、笑ふと實に目元が可愛い、その白い齒と共に一層人の心を魅きつけたが、春日にはその美しさ以上に、氣分に非常に好感が持てた。

「ねえ、何と云ふお名前ですか？」

とは、さつきからも幾度も彼女が彼に訊ねた言葉だつた。併し春日は少し考へる事があつて、名も所も告げ様とせず、その度に、

「一寸、それは待つて下さい。ちぎりに判つて戴ける様にしますから、別に天下を隠れて歩くわけでも無いんですが——」

などと、笑ひに紛らしたがる、行先についても同じだつた。

「ねえ、どうして教へて下さらないの、私、落ち付けばきつとお便りしてよ。それに——」

と、一寸口ごもつてから、目も伏せ勝に、

「——いろく——と——父だつて、お力になつて戴き度い事も御座いませうし——」

彼女も、いつか春日にこうした信頼に近い感情を抱く様になつてゐたのだ。春日も心から、今の彼女の立場も察しられて、無理もないと思ふのだつた。春日にしても、静子の美しさには、心を魅かれずには居られなかつたが、併し、彼はこんな場合に彼女に拘はつた考へ方は仕度くなかつた。只此の氣の毒な人達を東京に歸してやり度いとばかり考へて、それを此の場合、又一番良い事と堅く信じてゐた。

寒さも忘れた二人に、四五十分の時間が経つた。

「お名前も知らずに、こんなにお話するなんて變ですわ」
静子も微笑み乍らには云つたが、やはり満ち足りぬ淋し氣なものがあつた。春日は再び笑いに紛らして、

「アハ、、同じ事ですよ。此の船が着くと同時に、お互にお別れしてしまふんですから——」

事もなげの様に、わざと平氣にそう云へば、静子は暗い表情さへ浮べて、

「そうね。ぢきにお別れですのね。お名もお所も知らないで——」

一寸言葉を途切らしたが、

「でも——でも妾——貴男と云ふ方にお會ひした事、きつといつ迄も、忘れませんわ」

春日の胸近くに目を伏せて、思い切つたフーに云ふのだつ

階段を下カ——と誰か上つた来た。

春日がソツと静子の傍らから離れた頃、彼等に近付いたのは確かに大島の仲間の三人の男達だつた。無論静子を深しに來たものに違いない。彼等はそこに二人の姿を見出すと、何の意味もなく三人とも、春日にビョコ——と頭を下げた。

中の三十がらみの一人が、静子に近付き

「君、こんな寒い所にゐないで、早く下においでよ」

柄にもない優しい云い方をした。

静子が困つた様な瞳に、春日を見上げると、もう彼は三人の方に身を向けて、

「をう兄い達、此の人へのお迎へなら、北海道の大島に、自分で來なとそう云いな！」

静子に對するとはまるで異つた態度で、からかふ様な云ひ方をした。

中の、二十三の若いのが、何と云ふ事なしに又ベコリと一ツ頭を下げて、

「へい、どうも濟みません」

「アハ、、別に濟まねえ事はねえ。併し、心配するな、それは冗談だよ」

「へい、有り難う御座います」

「アハ、、お前、仲々面白えな、言葉になまりが無えが、東京の者か？」

「そうです。よくぞおつしやつて下さいました。江戸ッ子な

た。春日もいちらしげに、ヂツと彼女の白い額を見つめてゐたが、

「有り難う、お嬢さん、僕が名も告げぬ無作法は、それは直に判つて戴けると思いますが、僕もお嬢さんにお別れにこう申上げ度いと思ひます。——それは、今もお話した様に、僕は本當に旅ばかり續けてゐる風の様な男なのです。——その僕の人生行路中にお知りした貴女、又、何頃何處でお目にかゝれる時があるのかは、それは僕にも判りませんが、僕はおそらく永久に貴女を、貴女の美しさ、いちらしさを忘れる事は無いと思ひます。」

春日も充分に自分の氣持ちを云い盡せぬ儘に、只心から思つた通りを口にした。瞬たきもせずにはヂツと彼を見つめてゐた静子の瞳が潤んで來た。そして長いまつ毛をしめしたかと思ふと、ハラリと一滴——静子は袂からハンカチを出すと、その儘それで目を覆つてしまつた。

ヂツと見つめた春日も、さすがに胸の熱くなるのを覺えたが、

「お嬢さん、貴女は實に心の優しい人です。直に僕が、貴女のその心に、報いる事が出来ると思ひます」

春日は、静子には解し兼ねる言葉を殘した後を、堅く口を結んで海の彼方へヂツと目をやつた。

もう、青森の灯は見られ様もなかつた。只、水平線の彼方に燈臺の灯がニツ、ピカリ——と間を置いて点滅してゐる。

んで」

「アハ、、そうか。併しお前、大分スフが入つてゐる様なア……」

「エツ？へ、、おそれ入りやす」

「お前達心配しなくても大丈夫だ。ぢきに此の人も歸るから」

「へい何分お願いしやす」

三人とも又ベコリ——と頭を下げて、でも役目丈は濟ました様な顔付に、階段の方へ戻つて行つた。

春日は、彼等の姿が階段へ消へるのを、タバコを取り出し乍ら見送つてゐたが、やがて静子を振り返り見て、

「静子さん、僕も、うっかりしてました。寒かつたでせう！サア、御両親が心配なさるから、貴女も早くお歸りなさい」

静子は

「え——とは答へたが、如何にも去りにくげな彼女を、春日は心にいちらしいとは思ひ乍ら、

「船の着くのは十一時近くでせうから、貴女も少しでも休んだ方がいゝですよ」

靜かに先に立つて、彼女を階段口へ送つて行つた。静子は降り口にヂツと立つて、

「もう、本當にお別れですのね！」

淋しげに彼を見上げたが、未だ何か彼に、云ひ度い事の有りた氣な様子だつたが、春日が氣強く横を向いて、タバコにライターを点じるのを見ると、その儘思い切つたフーに、で

も力なげに、しほく／＼と階段を降りて行つた。

デツと降り口に立つた春日は、彼女が途中に立止つて、デツと自分を見返つた熱い視線を身に強く意識し乍ら、わざと氣強く、海に目をやつた儘動かさず、彼女の姿へは顔を向け様ともしなかつた。

五、春日の手紙

後三時間余りで、船は函館に着く豫定だつた。もう移動警察の調査も済んで、客の多くは睡つてゐたし、起きて話合ふ者達も小聲に、船内は至極静かだつた。只、エンデンの響丈がしつこく耳についた。春日の一行の半数は起きて、しきりに花札を闘はしてゐる。

春日は其の傍で、トランク二ツを台にしてレターペーパーにペンを走らせてゐたが、書き終つてか、再びデツと讀み返した。

同封の金子四百圓、是非お役に立て、下さつて、皆さんで早く東京へお歸り下さい。御尊父が勞働仕事に無理な事は貴女も良く判つて居られる事と思ひます。

こんな事で、恩を賣る様では心苦しく、心ならずも名も所も申上げず、此のまゝお別れしてしまひ度いと思ひます。僕の失禮も是で判つて戴けると存じます。

人生なんて、丁度今日の吹雪の様なものですよ。いくら荒れ狂つたとて、必ず明るい天日を、そして暖く晴れた

「いゝか、決して余計な事は云ずに、俺の名なんかしやべるなよ、そして無理にでもアノ人に渡してすぐ歸つて来るんだぞ」

「ハイよく判りました。必ず直接に渡して來ます」

惣一が凡てを呑み込み顔に、部厚な封書を受取つて、大切に

そうに自分の内ポケットに納めた。

春日は一同の方に目を向けて、

「おーみんなも、そんな事はいゝ加減にして、少しでも休んだ方がいゝぜ」

彼はその儘ごろりとそこに横になつて、デツと目をじた。

今は、一切の氣安さを感じる筈なのに、何故か一抹の淋しさを覺えて、妙にはかない思ひが胸をかすめた。只、デツと臉に静子の面影を画いて、東京に歸る時の彼等の喜ぶ顔を想像する丈だつた。——併し、考へればあの人は、東京に歸つてどうするだろう。東京に居るに居られなくなつて、東京を捨て、北海道に渡る氣になつた人達ではないか。併し、アノ大村と云ふ人も、しみん／＼と今度の事を輕卒だつたと後悔はしてゐた。静子と云ふ娘の言葉でも、未だ／＼相談に乗つて呉れる人があつたのだと云ふ。あの体では炭鑛ばかりか、何をやつても勞働などは無理だが、でも人間も、心がそこ迄行けば、何とか切り拓けない事はあるまい。アノ人達も東京にさへ歸れば、又更生の道もあるだろう。何にしても、自分のした事は、きつとアノ人達も喜んで呉れるに違いない。やが

春の日を迎へるものです。

明るく希望をお持ちになつて下さい。貴女の御身に、今後の幸多かれとお祈りして、お別れ申し上げます。

静子さま

記入の額の紙幣を數へて、手紙と共に大型の角封筒に入れた。部厚になつた封書を片手にデツとそれを見つめてゐたがやがて傍で花札に興じてゐる中の、惣一に目を向けて

「惣一」

「ハイ」と彼が振り返ると

「一寸、こつちへ來て呉れ」

自分の前に呼んで

「惣一、さつきの待合室の一件の娘さんなア——アノ人達はどの邊に乗つてゐるか知らないか？」

「エ、判つてます。右舷のブーと隅の方に乗つてゐます。あの

大島とか云ふ野郎も、同じ所に乗つてゐましたつけ」

「そうか——お前濟まねえが、上陸間際にな、何とかしてあの娘さんに此の手紙を渡して來て呉れ」

「ハイ承知しました。わア、兄貴、随分書きましたね」

春日はフト苦笑して

「唯な惣一、乗船間際はごつた返すから、よく氣を付けてな必ずアノ人に直接に渡して、それからお前は決して余計な口をきかずに直ぐに歸つて來て呉れ」

「ハイ、承知しました」

て春日もやつと軽い寢息を立てる事が出來た。

惣一が、春日が睡つた様子に、自分の隣りの未だ目覺めて

ゐる山田に低く言葉を掛けた。

「ナア山田、さつきの娘さんの親子な、アノ連中なんかも、やつぱり可愛そうな人の中だなア」

「全くだ、何もあんな親父さんが、ノコ／＼炭鑛なんかへ出掛けて無理しなく共、未だ／＼日本には、体の丈夫の野郎がゴロ／＼してゐらアな」

山田の隣りの清水がムツクリと首を上げて、

「山田、どう云ふわけで、人は余程困らなければ炭鑛へ出掛ける氣にならねえだろう？」

「それはお前、炭鑛労働は仲々大變よ。併しそれにはそれ丈の待遇をすればいゝ筈なんだ。未だ／＼普通の労働だつて炭鑛より骨も折れるし、又危険も伴ふ仕事はいくらもあらあなそれを人が炭鑛を嫌ふのは、つまり炭鑛は悪い所だと一般の人が思ひ込んでゐるからだ。その悪い所と云ふのは、第一につまり労働に伴はない待遇だ。もつと／＼資本家が労働者を良くして、特に炭鑛の様な所で働く人の待遇を、グツと良くすれば話は早いのもよ」

惣一が口を入れて、

「つまり、炭鑛に就職するのに一苦勞する様になれば良いんだな」

「そうだ。そんな時代が來れば先づ満点だ。炭鑛へ入るのに

手づるを求めるとか、上の奴にコミッションの一つも使はなければ、入れねえなんて具合にな」

「成る程、併し就職試験なんて事になると、俺達は少し怪しいなア」

「アハ、そういふわけだ」

山田が低い聲で笑つた。惣一が尙も小聲に、

「ナア山田、アノさつきの静子つて人な、アノ人は二休いくつ位だろう？」

「そうさなア、未だ二十一二つてとこだろう。併し、惣一がそんな事聞かなくて珍らしいなア」

「いや、俺はアノ人の年なんか気にしてゐるわけぢやねえけれど、只、俺の別れた妹と、同じ位の年ぢやねえかと思つてよ」

「あゝそうか、惣一の妹は二十二だとか云つたな——やつぱり何處に居るか判らねえのか？」

反對に頭丈を此方に向けて寝てゐた岡村が、むつくり脇を付いて首を上げ、

「そうだつたな。南洋から歸つたら兄貴に頼んで、みんなで惣一の妹を探す約束だつたが——ナニ今度の北海道の工事は、ものゝけ月とはかゝらねえ筈だから大丈夫だ。併し惣一、お前の妹が働いてゐた旅館にさへ行けば、すぐ判るんだろう？」

「うん、そうは思ふんだが南洋へ行く前に一度その旅館の主

人宛て手紙を出したんだが、返事もよこしやがらねんだ。何しろ妹が十五の時に別れたつきりなんだ。併し、俺達は本當に二人きりの兄妹なんだ——」

山田がしみんと、

「併しなア惣一、お前には探せばそんな妹があるからいいが俺ときたら、全く天涯孤獨だだから、俺は兄貴や岡村を、本當の兄貴だと思つてゐるし、お前達を本當の弟だとも思つてゐるんだ。」

「俺だつてやつぱり同じ事だ」

岡村の隣りの池田がムツクリと顔を上げて云つた。

静子の居る場所から、春日の居る邊りは大分離れてゐたし、それに近くと中央の二本の太い圓柱にさへ切られて、彼等の姿は見られ様もなかつた。

彼女は、母の傍らにヂツと横にはなつてゐたが、少しの睡さも覺えては來なかつた。

彼女は、今春日の事を思ひ續けてゐるのだ。靜かに、先程の彼の言葉を思ひ返した。あゝした人達の監督なぞと云ふいかめしい立場の人なのに、凡てに思ひやりのある優しい人。本當に男らしい方だつた。それにアノ素晴らしい腕力はどうだろう。靜子は今迄自分の心の中に、人の腕力を讚美する氣持ちが起るうなぞとは考へてもゐなかつた。それも是もみんな彼故へなればこそ抱く感情に違ひないとも考へられた。

——自分達の前途の不安に對照して、せめて、アノ方と同じ所に行けるのだつたら、どんなに心強さを覺える事だろうと考へられた。併しアノ方は、上陸すればもうお別れだとおつしやつた。そしてとう／＼名前も、お所も教へては下さらなかつた。——妾は何故もつと無理にでも、アノ方に伺つては置かなかつたのだから？妾は、アノ方の前で泣いたりしてしまつて——アノ方は、妾をばしたくないと思ひはしなかつたかしら——でも、妾は、仕方が無かつたのだ。胸が一杯になつてしまつたのだから……。

靜子が、あゝ思ひ、こう思ひして、何かしら彼にもつと云はねばならぬ事がある様な思ひに、せめて、上陸前にもう一度、彼に逢ひ度いものだと考へたりしてゐたが、やがて、「ボ——」と一聲、船が港近きを知らせるのか、乗客も、あちらこちらに起上つて、それ／＼に身の廻りを片付けはちめたがやがて、乗船直後のそれにもまして、船内は再びごつた返す様な騒ぎと混雜に變じて、とても春日の居る邊りなぞに近寄れそうにも思へなかつた。

六、春日等に乗せた汽車

午後十一時五十八分函館發、釧路行二三等急行は、今、闇の室蘭本線をまっしぐらに走つてゐる。東室蘭も既に過ぎた汽車は混んではゐなかつたが、殆ど函館で上陸した炭礦行の人々で、どの車も空席などは見當らなかつた。

春日は窓際に掛けて、見えぬガラス越しの闇に目をやつてゐた。思ふまいとしても、臉に浮ぶのは靜子の面影だつた。ものに拘はらぬ淡泊な彼にも、是ばかりはどうにもならなかつた。

背中合はせに席をとつた彼の若い者達が、彼が睡つてゐると思つたのか、互に小聲で語り出した。

池田の聲で、

「惣一、お前が手紙を渡したら喜こんだろう」

無論、船の中で惣一が、春日から靜子へと託されたものを云ふのだつた。

「ウン、はぢめは一寸驚いたらしかたが、すぐ兄貴の舍弟の惣ちゃんだと知つて——」

「嘘付きやがれ、何が惣ちゃんだ。惣べいなんか眼中にあるものか。で、河とか云つたかい？」

「うん、済みません。と云つた丈よ」

「それでお前何と云つたんだい？」

それは勝の聲だつた。

「兄貴が、是を渡せと云いました。と云つた丈よ。何遍訊くんだい」

惣一が尖つた聲で答へた。英三が、

「だからよ、その後を何と云つたんだと聞くんぢやねえか」

「なんにも云はねえ」

「莫迦だなア、黙つて歸つて來る奴があるかい」

惣一がふくれた様な聲で。

「莫迦、余計な事を云へば兄貴に怒られるぢやねえか」

「莫迦だな、そこが要領ぢやねえか、兄貴も、みんなも貴女の事を忘れません。向ふへ行つたら又會ひませうとか何とか云はねえ奴があるかい」

「何を云つてやがんでい、そんなくだらねえ事が云へるかい」
「で、何かい。手紙は見たのかい？」

勝が又訊いた。

「あの最中ぢやねえか、そんな間なんかあるものか。俺は只兄貴に云はれた通り直接に渡して、すぐに歸つた丈の事だ」

惣一が仕方が無かつたと云つた調子で答へた。

「あ、あ、兄貴もつまらねえ奴に大事な用を云ひつけたものだなア」

英三が、冗談にがっかりした様につぶやいた。

やがて池田が聲をひそめて、

「併し、アノ人達は此の汽車には乗つてゐねえつてな」

「うん、そうだつてよ。發車前に函館のホームで清水と松井が、はぢからはぢ迄窓から覗いて歩いたそうだが、アノ人達もそれから兄貴に、メリケン戴いたアノ野郎も、此の汽車には乗つて無かつたと云ふ話だぜ」

「アノ野郎大島とか云つたけな。何處へ行つたんだらう？」

「何處へつて、お前××炭礦なら俺達と同じ所だ。態と一汽車位遅らしたんだらう。例へ少しは離れた土地でも、兄貴の

所へはアノ人から必ず知らせがあらあなア」

勝が云ひ聞かせる様につぶやいた。

幾つかの小驛を過ぎて、汽車は小さい家屋のゴタ／＼と立並んだ昔小牧の驛に着いた。製紙の原料か、太い原木の山が驛の近くから山と連らなつて積まれてあるのが暗い電燈にも良く見てとれた。

春日の前と隣りの三人連れの男女が下車して、春日の周圍が空席になつたが、汽車はその儘發車して誰もその席をふさげる者が無かつた。も早、夜明けにも間が無いらしい。

春日が反対側の岡村等の四人に目を向けると、是ももう居睡りに飽きた様に、やはり小聲で何か話合つてゐる。春日は靜かにその方に聲を掛けた。

「岡村、一寸話をしたい事があるからみんなをこゝへ集めて呉れ」

彼の言葉に、全部の十四人が彼の前に集つた。丁度春日の前が車中ストープで、廣く明いてゐるので、一同はストープを圍んで立つたり座つたりで、春日の言葉を待つてゐる。彼は暫／＼と目を閉じて黙つてゐたが、やがて靜かに口を開いた。

「妙な事を云ひ出す様だが、アノ青森の待合室の一件の娘さんの親子な、——アノ人達はもう北海道の炭礦には來やしねえよ」

「どうしてですか？」

春日は苦笑つて、

「いや、おめえに持たせたアノ封筒の表と同じに、中にも俺は名も所も書かなかつたんだ。アノ人達は俺の名も所も知らねんだよ」

「へえ、どうして知らせなかつたんです、」

その山田の言葉と共に、一同も不審氣に春日の返事待つてゐる。春日は一寸口をつぐんだが、やがて沈んだ聲で、「實はアノ靜子と云ふ人とは、俺は船でいろ／＼と話合つたんだアノ人もあんな立場だし、俺の様な者でも話合へば、自然頼りにして、名も所もしきりに訊いたが、——俺は、こんな事で恩を賣るに思はれても有り難くねえと考へたし、又名や所を知らせたところで、何もそれ丈の事だ。——どうせ離れ／＼になつてしまへば、二度と會ふ人でも無いのだから、なまぢ名なんか告げねえ方が良いと思つたのよ」

「成る程！ヤツバリ兄貴だなあ、普通の奴には眞似が出来ねえや」

「本當だ！」

一同が同じ様に感じ合つた。春日は再び、

「只、俺がみんなに濟まねえと思ふのは、俺が平常みんなをろくな面倒も見ないくせに、こんな眞似をして、俺も一寸恥かしいんだ。併しあんなのを見て黙つてゐられないのが俺の性分だ。どうかみんなも悪く思はないで呉れ」

岡村がしんみりとした調子で、

三四人が同じ様に訊く。

「實はなあ、俺が東京に歸る様にしてやつたんだ。多分うまく行くと思ふんだ。いやうまくゆかなければならぬ筈なん

だ」

一同の中でも兄貴分の岡村が、

「へえ、どんな風にしてやつたんですか！」

「それはなア、お前達が考へてもあんな弱々しい人が、炭礦稼ぎなんか無理だとも、可哀そうだとも思ふろう」

「へえ、そりやアもう良く判りますとも」

山田が一同の心に代つて答へた。春日は、煙草に火を点じ乍ら、

「事情も大がいは、みんなも聞いて知つてゐると思ふが、アノ靜子と云ふ人にしろ、あんな大島とか云ふ野郎を近付けて置いたら、ろくな事はありやアしねえ。炭礦行の前借りのある事もみんなの聞いた通りだ。——俺はその金を、アノ人達の爲に出してやつたのよ」

岡村が、

「そりや良い事をしてやりました。ぢやあ、惣一が届けたのがそうだつたんですね」

「やつぱり兄貴だなア！」

二三が感じた風につぶやく。惣一が、

「それでは、アノ人達も東京に歸れば、すぐに兄貴に便りをよこしますね」

「イエ、とんでもねえ、俺達だつてどんなに嬉しいか知れません。併し兄貴、アノ大島とか云ふ野郎が、アノ静子と云ふ人を黙つて離すでせうか？」

「うん、俺もそれは考へないでもなかつたが、ナリー金さへ出せばこつちのものよ。多少のごた／＼はあつたにしても、まかり間違へば、警察へ飛び込む位のは、アノ親父さんでも出来るだろう。俺が渡した金は、利子から汽車賃返還しても、歸りの旅費は充分の筈だ。今時分は函館邊りの宿屋で少しは俺達の評さ位はしてゐるだろう」

「成程ね、本當に良い事をしましたね。併しんだか兄貴とアノ人が是つきりかと思ふと、一寸残念に思ひますね」

心から云ふ様な岡村の言葉だつた。岡村もこんなグループの男丈に、時には彼もやはりそんな単純な考へ方もした。

「莫迦だなア岡村、お前迄がそんな云ひ方をするなんて——！ 仲々どうして俺なんかの境遇に相應はしい人ぢやねえ」

「そんな莫迦な事があるのですか。兄貴は心の綺麗な人だし、學問はあるし、収入だつて失禮乍ら兄貴位の年の連中の何倍もあるんだし、縁なんて何處にあるか判らねえものですかね」

一同が心からそれに頷いてゐる。春日は遂、笑出して、「アハ、つまらない話はよそう。そんな事より、俺はみんなに云つて置き度い事があるんだ。あの大島の事なんだ。俺達も行つた先で、もし奴等に會はないとも限らねえ。俺も

成行とは云ひ乍ら、つまらない眞似をしたものだ、實は今では後悔してゐるんだが、まあやつちまつた事は仕方がねえもし奴等に會ひでもして、妙な事にでもならねえとも限らねえが、もしそんな時があつたら、話は必ず俺がつけるから、みんなは決して勝手な手出しはしないで呉れ。」

「併し兄貴、そう云つたつて、種を巻いたのは俺達なんですから、どうもそんな時は俺達にやらして下さい」

岡村のその言葉に、彼の仲良しの山田も、

「そうだ、俺達に責任があるんだ。どうせ何ですよ。俺や岡村は、人を斬つて罰金から体刑迄喰つた体です。今更あんな野郎共にビクともしやアしません」

傍らから勝も口を入れて、

「そうだも、俺だつて同じ事だ」

春日は静かにさすとす様に、

「つまらねえ事を云ひ出すものぢやねえ。それ丈にお前達は余計身を慎まなければならねんだ。併しそれ故に、會社に籍があつて、籍の無い様な俺達で、いつも臨時の文字を頭にくつ／＼けられてはゐるけれど、それでもやはり、會社の立場位は考へてやらなければいけねえ。それにいくら雪の北海道でも、まさか、斬つたりはつたりばかりやつてゐるわけでもあるまい。あの大島だつて人間なら話して判らない事は無い筈だ。みんなもいゝか、呉々も俺がいゝと云ふ迄は勝手な眞似はしないで呉れ」

さすがに事をわけた春日の言葉には、一同も只無言に頷くばかりだつた。

「へい、良く判りました。決して勝手な眞似はしません。おう、みんなも判つたなア」

一同も改めてそれ／＼に頷いた。

直ぐに支線に別れる彼等の乗り替の場所の道別の驛にも近いらしく、やがて夜も白々と明けてきた。北海道も此の邊りは、廣々とした所も見當らず、雪の山野に雑木林の様な森林が、汽車の沿線にそつて、果しもなく續いてゐる。汽車も匂配にかゝつたらしく、ガツタンゴツタン、とスピードをゆるめて走つてゐた。

やがて彼方の間近の山影から、棚引く雲を切つて、雪の山野に眞紅の太陽が赤々と上つた。

春日は立上つて、窓外に目をやつて、

「おう見る、今日は晴れだぞ！」

彼は、今は一切か忘れた様に、ニコリと笑つて、大きく一ツ兩手を舉げてのびをした。

三ツ程先のシートから、モンベイ姿の老婆が一人立上つて、

「三ツ程先のシートから、モンベイ姿の老婆が一人立上つて、」

ズツと日輪に向つて、手を合はせた。

特別會員贊助金謹告 (敬稱略)

- 二、〇〇〇圓 日本水素工業株式會社
- 一、〇〇〇圓 臨港鐵道株式會社
- 一、〇〇〇圓 小名濱港灣運送株式會社
- 一、〇〇〇圓 磐南鐵道株式會社

- | | | |
|--------|-----------|-----------|
| 二、〇〇〇圓 | 同 小名濱町會議員 | 小 野直千賀 |
| 一、〇〇〇圓 | 同 同 | 藥谷寅之助 |
| 一、〇〇〇圓 | 同 同 | 柏浦角治 |
| 一、〇〇〇圓 | 同 同 | 藤田組一 |
| 五〇〇圓 | 同 町會議員 | 林 林 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 小 野 禮 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 小 名濱鐵工組合 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 田 中 吉之輔 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 金子建鐵株式會社長 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 金子 磯五郎 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 内郷町宮鬼澤 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 奈 上 治男 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 内田建設株式會社長 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 黒 田 岩男 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 内名濱町本町 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 清 水 秀雄 |
| 五〇〇圓 | 同 同 | 清水工業所長 |
| 四〇〇圓 | 同 同 | 鈴 木 正 |
| 三〇〇圓 | 同 同 | 吉 田 鐵 |
| 三〇〇圓 | 同 同 | 瀧澤材木店 |
| 三〇〇圓 | 同 同 | 瀧澤 松 |
| 三〇〇圓 | 同 同 | 橋本 之助 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 草野組 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 渡邊會計事務所分室 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 草 野 惠正 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 町會議員 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 立 花 秀清 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 町會議員 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 菅 原 可 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 丸濱運送店 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 齋 藤 義 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 大 原 見中 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 同 齋藤義勝 |
| 二〇〇圓 | 同 同 | 同 齋藤義勝 |

編輯後記

「港の灯」の編輯の抽き出来振りにも關はらず、各方面よりの御慰勞のお言葉、並びに稿いのお便り等を戴き、努力感謝申上げ、今後の一層の努力を奨ふものとす。巻頭の社説、約一萬字。元日の夕刻から夜中迄、一氣に書き上げたものです。切に諸賢の御再讀を乞います。川添恵美子氏の「御返事」は私信ですが、一ツの文章としても、見るべきものが有りと存じ、敢て掲載させて頂きました。今月、是と云ふ書き立てる様な問題も無かつたので、新聞と異ひます。無理に書くと云ふ態度をとりませんでした。實は選別炭組合の問題を共考へましたが、もう少し情勢を直視して、要らば、筆を執り度いと考へて居ります。總選舉に就いては、本誌發行日から考へて、別にその要も有りませんが、社説の一部に私見を述べたのみに止どめました。

居ましたが、どうも無理に堅苦しい字句を使つて、脱線勝ちに成り、肝心のその云はんとする處を現はし得ないのが多かつたのです。その中に宇佐美氏のものは一番堅實で有り、意もよく徹して居られる様に思ひましたので、是を戴きました。まるで懸賞募集の様な言葉を使つて失禮ですが、一寸事情御報告迄、柏浦角治氏の「文章に親しむ迄」氏を知る私としては、長足の進歩と申上るものです。兎に角、發行前から今日迄變り無い態度で、私を獨りにしないで呉れた人です。新妻渡の「光を戀ふ」氏の病後の感想とも云ふべき、氏の獨特の考察ですが、讀者にも味はります。戴けるものが有る事を信じます。

人根本敢雄や及會員佐藤清美氏の御批評を乞ひ、「や、よし」本誌に發表致しました。又川柳なぞもやりたければ作るに限ると云つたもの、様で、先日Y・西九氏と本誌のK氏が見えた時、Y・西九氏の話で、いつか水素で川柳で「百圓」と云ふ題が出たので、いはゆる「分ゲーム」とやりまして、大いに兩氏から賞めて戴きました。又、K氏が「米配給」と云ふ題でやれと云ふので、「喜こびと金におひえる米配給」とやつてみました。が、こんなブーに、ぶつかれば、それらしいもの、が出来る事丈は確かです。併し、如何にとりつき易くとも、凡そ本格的となると、仲々むづかしいものらしいです。併し短歌でも、文章でも、失禮ですが、それらしいもので結構ですから、どうか少し、投稿下さつて、前號にも申上げました様に、本誌を、文章の研鑽練習の道場にして戴き度いと、改めてお願い致します。尚、今月號七百部發行を御禮申上ると共に、その際、此の度企画部に入社された加藤順一氏の活躍のある事を茲に御報告させて戴きます。

文藝と娯楽と郷土の言論機關 ……「港の灯」……	同人雜誌「港の灯」
主幹 東 義 將	東 義 將
同 人 鹿 野 卓 郎	鹿 野 卓 郎
同 人 新 妻 敏 郎	新 妻 敏 郎
同 人 根 本 敢 雄	根 本 敢 雄
同 人 近 藤 治 雄	近 藤 治 雄
同 人 小 野 義 一	小 野 義 一
同 人 柏 浦 角 治	柏 浦 角 治
幹 事 小 野 義 一	小 野 義 一
幹 事 加 藤 順 一	加 藤 順 一
企 劃 部 順 久 一	順 久 一
每月一回 二十五日發行 投稿切 毎月十日 原稿、文筆ニ關スルモノ凡テ自由 入會金 四十圓 會 費 六十圓	福島縣小名濱町船引場四三 編輯人 東 義 將 發行人 東 義 將 福島縣平市一丁目二九 印刷所 平 活 版 所 福島縣小名濱町船引場四三 發行所 同人雜誌「港の灯」社

釀 友 清 郡 銘
世 界 成 造
酒 鱗 界 成 造

吉 清 水 屋 商 店
小 野 義 一
小 名 濱 町 電 話 六 番



迎 春
運 輸 省 指 定 旅 館
小 瀧
渡 邊 キ ヨ 子

御宴會には是非郷土の歡樂郷鎮泉旅館「小瀧」を御利用下さい
御宴會團體御宿泊等御豫算で格安にお引受け致します
湯本街道バス「小瀧前」下車
小名濱町中心ヨリ徒歩二〇分

電話(小名濱)一〇三番

迎

春

富ヶ

浦病院

福島縣小名濱町中坪
電話(小名濱)三三三番

内 科 部 長	小 兒 科 部 長	外 科 部 長	皮 膚 科 部 長	泌 尿 器 科 部 長	産 婦 科 部 長	婦 人 科 部 長	耳 科 部 長	眼 科 部 長	放 射 線 科 部 長	庶 務 部 長
安	厚	佐	佐	福	福	佐	安	佐	安	佐
田	見	藤	藤	井	井	藤	藤	田	藤	藤
喜	秀			秀	秀					
一	雄	正	正	子	子	正	正	郎	三	三

昭和二十四年一月二十五日印刷
昭和二十四年二月一日發行

同人雜誌「港の灯」

第一卷 第二號

庫

9287